

年報

平成 23 年度



東京医療保健大学東が丘看護学部

TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

Faculty of Nursing at Higashigaoka

# 東京医療保健大学 東が丘看護学部

## 平成 23 年度年報の刊行にあたって

高等教育の質保証のために、学校教育法等に、自己点検・評価の実施と、その結果の公表が義務づけられております。

大学には、認証評価や法人評価などさまざまな評価が課せられておりますが、いずれの評価も基本になるものは、自己点検・評価です。組織としての大学および大学人としての教職員が、自ら主体的に、現状を正確に把握したうえで、評価し、改善に結びつける取り組みを継続して行っていかなければなりません。

国立大学の法人化を契機に、「評価文化」が国公立大学にしっかり根づきつつあることを実感する今日この頃ですが、一方では、「評価疲れ」などという声も耳にします。

本学では、平成 22 年度の開学以来、自己点検・評価の一つとして、年報を発行し、それを公開することにしてまいりました。今回、年報第 2 号を刊行する運びとなりました。

自己点検・評価が、大学、大学人の文化として定着するためには、①義務的にではなく、主体的に継続して行えるようにすること、②自己点検結果が、自己研鑽・改善につながるようにすること、③自己点検の行為そのものに対する負担感がすくないことが大切だと思っております。

年報を作成し、公表することにより、

① 教育、研究、社会貢献を含めた本大学の活動を定期的に社会に知っていただくこと

② 一人ひとりの教職員が大学組織人としての自己の足跡を残し、自分の活動をいつでも振り返り、自己評価につなげることができると期待しております。

一人ひとりの教職員が納得のいく教育研究等の足跡を、毎年、年報にしっかり残せるよう努力してまいります。

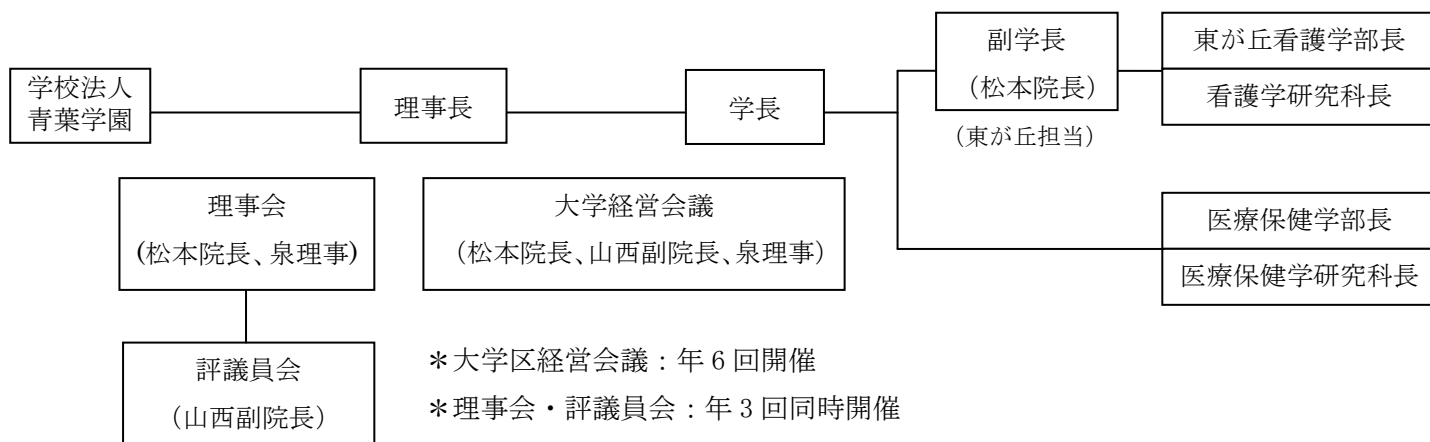
年報をご笑覧いただいたみなさまからの率直なご意見・ご批判を真摯に受け止めながら、高等教育の質向上に向けて精進してまいります。

平成 24 年 6 月  
学部長/研究科長 草間 朋子

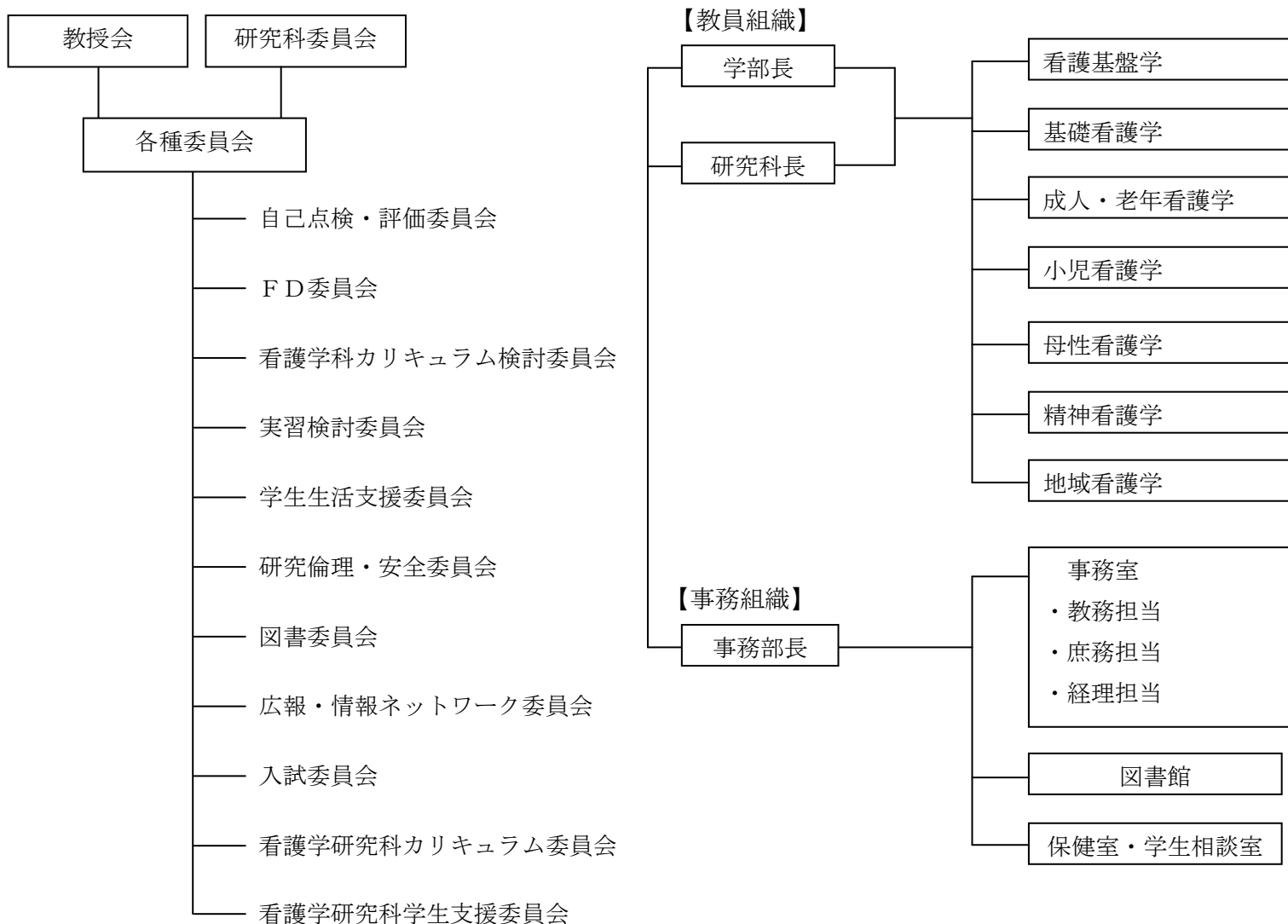
## 目次

- 1、 委員会/ワーキンググループの活動
- 2、 学内行事の概要
- 3、 教育活動
- 4、 業績
- 5、 教職員名簿

### 大学組織図



### 東が丘看護学部の運営組織



## 1、 委員会/ワーキンググループの活動

### 1-1 教授会

#### 構成員

草間朋子（学部長）、教授および准教授、山西文子臨床教授

教授会の役割は、東が丘看護学部の教育上の重要事項、学生の入学や退学に関する事項、教育課程及び試験に関する事項、研究及び教育に関する事項、学生の在籍に関する事項等について、審議決定することである。本年度は11回の教授会を開催し、学部の入試の合否判定、進級判定、休学や退学について審議を行った。

### 1-2 看護学研究科委員会

#### 構成員

草間朋子（研究科長）、教授および准教授、山西文子臨床教授

看護学研究科委員会の役割は、看護学研究科の教育上の重要事項、学生の入学や退学に関する事項、教育課程及び試験に関する事項、課程修了及び学位に関する事項、学生の在籍に関する事項等について、審議を行うことである。本年度は11回の看護学研究科委員会を開催し、大学院の入試の合否判定、進級判定について審議を行った。

### 1-3 自己点検・評価委員会

#### 構成員

田中留伊（委員長）、今井秀樹（副委員長）、日比野守男、石川倫子、小宇田智子、村川陽子、中村裕美、田村聡明大学経営会議室長、荒木長事務局長、木原英三事務部長

本委員会は東が丘看護学部の自己点検・評価について、以下の活動を行った。

- 1) 教職員の一年間の活動を振り替えることを目的に年報を作成した。年報は広報委員会に依頼しホームページ上に公開した。
- 2) 開学2年目ではあるが、大学基準協会による第三者評価に際して、事務部と協働して提出する資料の内容を整理するとともに取りまとめを行った。
- 3) 学生による教員の授業評価アンケートを行い、次年度のシラバスや授業に反映できるように、科目を担当する教員に集計結果の返却を行った。また、看護学研究科の授業についても、授業評価アンケートの実施を行った。
- 4) 東京医療保健大学災害防災対策規定を事務部と協働して作成した。
- 5) 本学部における文献引用及び記載書式を作成した。
- 6) 昨年度より、ハラスメントに関する取り扱い細則、発生時のフローチャートを作成し、

実際に発生した際に備えていたが、本年度も取り扱う事例はなかった。

#### 1-4 FD委員会

##### 構成員

田中留伊（委員長）、今井秀樹（副委員長）、日比野守男、石川倫子、小宇田智子、村川陽子、中村裕美、田村聡明大学経営会議室長、荒木長事務局長、木原英三事務部長

本委員会は教職員の資質の維持向上を図るために、以下の活動を行った。

- 1) 開学して2年目と日が浅いため、全ての教職員を対象に本学設立の経緯や特色について、学部長より「本学2年目を迎えて」講演を行い、学生に対してより良い教育を提供するための共通理解を深めた。
- 2) 特定看護師(仮称)・診療看護師を育成するための資質向上を目的に、亀田医療大学大学開設準備室長クローズ幸子氏による「アメリカにおけるNP活動の実態」参加を促し、NP教育に対する意識の向上を図った。
- 3) 教職員を対象に、「科学研究費補助金申請講習会」を企画し、大分県立看護科学大学甲斐倫明研究科長を講師に招き、「科研費獲得：なぜ？ どうやって？」講演をして頂いた。申請未経験者への情報提供と、競争外部資金申請に向けての全教員の意識向上を図った。
- 4) 特定看護師(仮称)・診療看護師を育成するための資質向上を目的に、本学学生と日本初のプライマリケア領域における特定看護師（仮称）として実際に活躍されている塩月氏、光根氏との交流会参加を促した。講演「特定看護師（仮称）としての活動とこれまでの道のり」や学生との質疑応答を通して、NP教育と卒業後の連携について考える機会となった。
- 5) 特定看護師(仮称)・診療看護師を育成するための資質向上を目的に、看護学研究科公開講座 Garrett Chan 先生による「急性期のナースプラクティショナーの過去、現在と未来の役割」講演参加を促し、NP教育に対する意識の向上を図った。
- 6) 当委員会の委員のべ2名が FD研修会や大学評価に関する研修会等に参加し、研修結果を学内教員と共有した。

#### 1-5 看護学科カリキュラム検討委員会

##### 構成員

松山友子（委員長）、清水洋子（副委員長）、宮崎文子、浅野妙子、小村三千代、古都昌子、田中留伊、小宇田智子、坂本祐子、佐藤潤、小嶋奈都子  
木原英三（事務部長）、山西文子（理事）

本委員会は、東が丘看護学部の教育の資質向上に向けて、カリキュラムの充実及び教育環境の整備などに関する年間実施計画に沿い、以下の活動を行った。

- 1) カリキュラムの運用・編成について

平成 24 年度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正に合わせ、看護師教育に特化した新カリキュラムの検討を重ね、10月に文部科学省より教育課程変更の承認を受けた。また、同時に現行カリキュラムについても養護教諭免許申請に向けた学則変更の承認を受けた。さらに、次年度は3学年が揃い、領域別実習のローテーションも予定されているため、週間時間割を作成し、授業の重なりや設定期間に無理がないように調整した上で、事務部に時間割作成を依頼した。シラバスについては、前年度作成したフォーマットおよび記載方法を一部修正するとともに、できるだけ見易く活用しやすいように全体の記載方法の統一を図った。

#### 2) 成績・進級等の学生の到達度評価について

学生が効果的に学習成果を積み重ねていけるように進級要件を検討し、次年度から学生に周知することとした。成績については、1年次生、2年次生の必修科目および選択科目の成績一覧表を作成し、単位認定状況を確認した上で、進級の可否について教授会の承認を得た。また、成績不振学生に対する大学としての方針について検討した。

#### 3) 教育環境の整備（教材・教具）について

前年度から引き続き、各領域で管理する教材（主として演習・実習用看護用品）のリストを半期ごとに更新し、全領域で共有した。年度後半に予定していた次年度物品購入計画の作成については、大学の移転ワーキングの中で検討した。

#### 4) 履修規程および学生便覧の検討

次年度からカリキュラムが改正されるため、これまでの内容を全面的に見直し、新たなカリキュラムの考え方や特徴を反映した内容に修正した。また、「学修の評価」については、欠席や再受験、進級要件等の重要な項目について検討を重ね、教授会で承認を得た。さらに、新カリキュラムだけでなく、現行カリキュラムに対応する学生便覧についても、学則変更等に伴う修正や「学修の評価」に関する修正を行った。

### 1-6 実習検討委員会

#### 構成員

小村三千代（委員長）、古都昌子（副委員長）、穴沢小百合、伊藤桂子、村川陽子、坂本祐子、松沼留美子、渡邊淳子

本委員会は東が丘看護学部の教育の資質向上に向けて、看護学実習の実習計画および臨地実習要項(2012)などに関する年間計画に基づいて、以下の活動を実施した。

#### 1) 実習計画

##### (1) 1年次生の実習計画

平成 23-26 年度の実習計画を作成し、実習時期や実習施設、1グループの学生数や実習担当教員数、また、実習計画を実施するにあつての課題と対策などを検討した。

## (2) 2年次生の実習計画

選択実習（リハビリテーション看護実習および障害者看護実習）に関する学生へのオリエンテーション日程や内容、希望調査や人数調整、実習施設への説明や調整を行った。学生へのオリエンテーションでは、学生が自ら選択できるよう実習施設に関する情報の夫を重ねて提供した。

また、平成 23-25 年度の実習計画を検討し、作成した。2 年次後期から開始する各看護学領域の実習に向け、実習要項の作成および学生へのオリエンテーション、実習施設との対応や説明などに関して検討した。

## (3) 3年次生の実習計画

平成 24-25 年度の実習計画の実習時期や実習施設を確認し、作成した。また、実習計画を実施するにあつての課題と対策などを検討した。

## 2) 臨地実習要項 (2012)

平成 24 年度以降の新カリキュラムに向けた内容に修正し、新たに「臨地実習中における震災等災害対応マニュアル」を追加した。特に、看護学実習の意義、目的、目標、実習構造図、臨地実習インシデント等報告書に関して見直し、改訂した。

## 3) 実習カレンダー

実習期間中の教員スケジュールを明確にするために、平成 24 年度の実習カレンダーを作成した。

## 4) 実習用看護物品

東が丘看護助産学校より譲渡された実習用看護物品に関して、管理・運用の方法に関して検討した。

## 5) 看護学実習連携会議

教員と実習指導者が連携・協働して学生の実習指導が担えるよう上記会議を企画し、平成 24 年度から運営できるよう検討した。

## 1-7 学生生活支援委員会

### 構成員

穴沢小百合(委員長)、田中留伊(副委員長)、伊藤桂子、松沼瑠美子、吉満祥子、小嶋奈都子、喜多村学生支援センター長、花田教務部長、木原事務部長

本委員会は学生の生活全般に関した支援体制を整えるため、以下の活動を行った。

### 1) 健康管理について

健康管理は、年 2 回保健師の委員会出席を求め、健康管理の状況についての報告を受けたことで情報の共有・把握につながった。また、インフルエンザ対策としてマニュアルを改正すると共にワクチン接種について原則全員接種の方向性を明確にし、接種状況を把握することができた。一方で、麻疹・風疹・流行性耳下腺炎・水痘に関する抗体価の確認お



よびのワクチン接種状況に関する情報の整理・把握が不十分であり、実習直前まで学生に報告を促す状況であった。次年度は、この点の改善に向け情報整理のタイミングや学生への指導について検討したい。

#### 2) 学年担任・コンタクトグループについて

学生の学生生活および学習継続に関わる問題については、委員長が担任と連携し情報を共有しつつ対応にあたり、遅滞なく対応することができた。

コンタクトグループについては、合宿研修の中止に伴い4月のガイダンス時に1年次生・2年次生の合同ミーティングや2年次生によるオリエンテーションを行い、学生間の交流が図られ好評であった。しかし、その後のコンタクトグループの活動は低迷しており、学生は実習や演習を通して学習等に関する相談をすることが多く、コンタクトグループの担当教員を活用する事例が少ない状況であった。次年度は学生生活支援委員会内にコンタクトグループを担当する委員を配置し、活性化に向けた方策について検討したい。

#### 3) 学友会活動の支援について

スポーツ大会、大学祭の全学行事に対応し、大学祭では、学科企画として学部の紹介をポスターとスライドショーで展示し、学生の成長や活動の様子を示すことができた。これらの活動には助手の教員の参加を得て、学生と密接に関わりながら活動することができた。また、国立病院機構東京医療センターとの協同による、七夕飾りやクリスマスツリーの展示などを実施した。特に七夕飾りでは、準備や飾り付け、期間中の短冊の補充等に加え、終了後には短冊を回収し神社に奉納した。短冊の中には患者様・ご家族の切実な思いが綴られているものがあり、学習の機会にもなった。この活動は次年度も継続する予定である。

#### 4) 学生便覧について

「Ⅲ. 学生生活」について、ページ全体を見直して加筆修正を行うと共に、インターネット活用上の留意事項を加えるなど学生が陥りやすい状況について注意喚起を促す内容を追加し改訂した。

### 1-8 研究倫理・安全委員会

#### 構成員

今井秀樹（委員長）、宮崎文子、田中留伊、小宇田智子

本年度は「人・ヒトに関する研究倫理審査申請書」の改訂を行った。受理した研究倫理審査申請が18件であり、うち16件を承認した（2件は申請取り下げ）。研究倫理審査は原則として審査申請のあった翌月に委員会を開催（8月は開催せず）して行っている。

### 1-9 図書委員会

#### 構成員

浅野妙子（委員長）、金子あけみ、坂本祐子、小宇田智子、中村裕美、飯島正敏図書館司書、

## 官澤公美子図書館司書

本委員会は学生及び教職員の教育及び研究に資するため、および年度末の新校舎への移転を視野に入れて、以下の活動を行った。

- 1) 新校舎への移転準備として、今年度の購入図書を最小限とすること、除籍作業を進めることとした。図書費使用実績は昨年度の約3分の1であった。除籍作業は除籍基準にもとづいて実施し、資料としての価値を失った白書、統計関係資料、医学関係図書 556 冊を除籍し廃棄した。
- 2) 本学で購入している和洋雑誌 115 冊について各領域の教員で見直すためにアンケートをした結果、新規購入雑誌 2 誌、購入中止雑誌 7 誌を選定し、来年度からの購入和洋雑誌を 110 冊とした。
- 3) 図書館資料の情報の充実、及び管理を効率的に行うため、新たな検索システムとして医療総合情報サイト「メディカルオンライン」および「最新看護索引 Web」に日本看護学会論文集を導入した。
- 4) 移転作業の一環として、旧厚生労働省看護研修研究センターより移管された蔵書（約 8000 冊）のうち新校舎に移転する図書を各領域の教員で分担して選定した。その結果、2000 冊の図書を選定し、LIMEDIO への登録作業を行うことになった。
- 5) 図書館サービスを向上し、図書利用を充実させるために、大学院修了生に対する図書室利用、貸出手続きに関する案内を学生便覧に追加掲載した。
- 6) 寄贈図書の受け入れについて、以下のことを決定した。①東京医療保健大学東が丘看護学部図書室の除籍規準に該当する書籍については受け入れない。②それ以外の書籍に関しては引き受ける前に図書委員会で受け入れの判断をする。

## 1-10 広報・情報ネットワーク委員会

### 構成員

清水洋子（委員長）、佐藤潤（副委員長）、日比野守男、穴沢小百合、伊藤桂子、渡邊淳子

広報・情報ネットワーク委員会の運営及び平成 23 年度委員会計画に基づき、入試広報部および関係する委員会等と連携して以下の活動を実施した。

#### 1) 大学案内について

(1) H23 年度大学案内は、計画通りに作成し、活用を図ることができた。

具体的に、現状の教育内容や学生の様子がよく伝わるように内容を工夫した。

大学院の内容については、高度実践看護コース、高度実践助産コースの内容を含め、学部と合わせて一冊にすることが決定し、教育の特徴がより PR できるよう掲載内容を工夫した。

(2) 次年度の課題として、新カリキュラムに対応した内容にしていくとともに 1~3 学年の学生の声を広く集め、本学部の特徴をより PR し一層の大学案内の活用が図れるよう検討していく予定である。

## 2) オープンキャンパス・学校説明会・学校見学等について

(1) オープンキャンパス関連の日程やスケジュールが直前に変更されていることがあり、担当する教員や学生に直前の対応協力をお願いすることがあったが、入試広報部と連携し教職員の協力を得て、大きな問題もなく計画どおり実施できた。

今年度はオープンキャンパスの事前説明会を実施したため、当日のスムーズな運営につながった。また、新たな試みとしてキャンパス見学ツアーと個別見学を実施し、参加者の反応は好評であった。

(2) 次年度の課題として、オープンキャンパス等の動画を受験生確保に活用することを検討する。また、広報活動のさらなる充実を図るため入試広報部との連絡・連携を強化し、より効果的な広報活動のあり方を検討する必要がある。

今年度から開始した個別見学については、次年度は月1回程度を目途にして6月より実施する予定である。

## 3) ホームページについて

(1) 入試広報部情報ネットワーク担当者と協力し、当初の計画通りにホームページの掲載と活用が図れた。今年度はホームページの更新時のチェックを実施した結果、昨年度みられたホームページ開示内容の誤り等の問題がなくなった。

また、入試広報部および自己点検委員会と連携して東が丘看護学部年報のコーナーをホームページに開設することができた。

(2) 次年度の課題として、学内教員のホームページの活用が少ないため周知活動をしていく必要がある。また、今年度の目標であったアクセス解析は実施できなかったため、引き続き入試広報部に依頼し、検討する予定である。

## 4) その他

今年度より全学的入試広報委員会に委員2名（委員長、副委員長）が参加した。

次年度は全学的入試広報委員会との連携を密にとりながら、本委員会の効果・効率的な活動を行うための検討をしていく予定である。

### 1-11 入試委員会

#### 構成員

構成員は非公開としている。

東が丘看護学部、大学院看護学研究科の入学試験に係る事項全般について審議し、試験の円滑な実施を図った。前年度までの選抜・併願状況等を勘案し、今年度は学部の一般入試における面接を廃止した。また、新設の高度実践助産コースの募集要項について検討した。その他に、センター試験利用入試における理科2科目受験者への対応、携帯電話等による不正防止措置、試験時間中の地震等への対応についても協議した。

次年度はこれまでの入試実績を踏まえより適切な入学試験のあり方について検討する。

## 1-12 看護学研究科カリキュラム委員会

### 構成員

石川倫子（委員長）、今井秀樹（副委員長）、宮崎文子、浅野妙子、松山友子、清水洋子、渡邊淳子、佐藤潤、山西文子（臨床教授）、上原係長

本委員会は看護学研究科の運営及び平成23年度委員会計画に基づき以下の活動を行った。

- 1) 看護学研究科としての履修規定の作成、履修要項の修正を行った。
- 2) 22年度における学生・教員における授業評価、厚労省看護師特定能力養成に必要な教育内容（具体的なイメージ）を参考に、カリキュラムを一部変更した。変更内容は、①クリティカル領域における看護理論の強化、②臨床薬理学特論では学生の到達が知識レベルにとどまり、その知識を活用するまでに至っていないため、より実践に活かせるよう演習を設定した。
- 3) 初めての実習であり、学生の実習を円滑に展開するため、実習担当教員で構成する「統合実習」に関するWGを設置した。
- 4) 実習施設管理者、指導医師、看護部と実習内容や方法等について共通理解を図るために国立病院機構東京医療センター及び災害医療センター、東京病院で臨床教授会を開催した。同様に実習後にも実習課題を明らかにし、次年度の実習に活かすために臨床教授会を開催した。
- 5) 実習前能力確認試験、最終試験の実施に伴い、その評価を行い次年度の課題を明確にした。また2年間における試験の目的と方法の見直しを行った。
- 6) 学生の到達状況等の把握を行い、課題がある学生への指導の検討をした。
- 7) 諸外国で活躍するNPの活動を視察したいという学生の要望から海外研修の企画をしたが、いくつかの課題があり今年度は見送りとした。このためスタンフォード病院の救急医療の現場で勤務するナースプラクティショナーの方による公開講座を行った。また日本で初めての特定看護師（仮称）2名との交流会を開催した。
- 8) 平成23年度「厚労省 特定看護師（仮称）調査施行事業実施課程」として承認され、適宜報告を行った。
- 9) 「平成24年度厚労省看護師特定行為・業務試行事業」における施設と大学の連携体制について検討した。
- 10) 平成24年度から開設する高度実践助産コースのカリキュラムの報告・検討を行った。

### 1-12-1 高度実践看護コース「統合実習」に関するワーキンググループ

#### 構成員

石川倫子（責任者）、今井秀樹、小村三千代、浅野妙子、田中留伊、佐藤潤、児玉菜桜

実習を円滑にするために「統合実習」に関するWGを設置し、以下の活動を行った。

- 1) 初めての実習のため、2週間に1回WGを開催し、実習状況の共有を図った。
- 2) 実習内容や評価内容、方法における共通認識を図った。
- 3) 学生の到達課題や学習環境（プリンターや図書、シミュレータなど）における課題解決を話し合った。
- 4) 評価結果から一定の規準をもって評価されているのかを検討した。
- 5) 実習の学びと課題について、検討とその実施を行った。
- 6) 実習要項の見直しおよび次年度実習配置の検討を行った。
- 7) 臨床教授会の企画を検討した。

#### 1-12-2 高度実践助産コースワーキンググループ

##### 構成員

宮崎文子（責任者）、渡邊淳子、小嶋奈都子、早坂奈美、大石時子（天使大学大学院助産研究科教授）、加藤章子（東が丘看護助産学校専任教員）

WG回数月1回 計12回実施。

本年度は昨年に引き続き、平成24年4月の開設を目指し、東京医療保健大学大学院 助産師学校指定申請提出書類の作成について、本学大学院看護学研究科看護学専攻高度実践助産コース（修士課程：助産学）の指定を受けるための内容検討を以下の項目（保健師助産師看護師法第20条第1号、同法施行令第12条の規定）に基づき行った。

- 1 どのような助産師を養成したいか、（設置理由・目的・養成人材像）、大学院（修士課程：助産学、定員10名）の教育理念、教育目標、入学者選抜の概要
- 2 教育課程と指定規則の対比表
- 3 授業科目の概要一覧（担当教員の選任含む）
- 4 専門科目に関わる教育機器100点程度及び図書100冊程度の目録
- 5 校舎等建物の配置図
- 6 専任教員の個人調書及び教員就任承諾書
- 7 実習施設の指定（承諾書）と概要一覧（施設依頼含む）、年次別実習計画、実習指導要綱概要、実習指導体制

以上の書類作成に当たり文部科学省の数回の助言を受け作成し、本学教授会へ報告・承認を得た。申請書類は、10月東京都知事への指定申請を経由し、文部科学省へ指定申請を行い、11月30日付けで助産師学校指定申請の認定を受けた。

本学大学院で強化したい教育内容は、国も推進している助産師外来・院内助産に対応ができる専門性の高い自律した助産師の養成である。10名の定員の中で①助産師免許取得プログラムと②助産師有資格者（論文）プログラムの2コースを設けた。認定された後、学生募集要項作成と学生募集を行い、第1期生は8名の学生が入学予定である。

### 1-13 看護学研究科学生支援委員会

#### 構成員

宮崎文子（委員長）、清水洋子（副委員長）、石川倫子、村川陽子

目的：院生の学習及び生活上の問題点について対応を考え・支援する。

委員会回数：必要時

#### 活動内容

主な活動は、①学生の学習及び生活上の対応、②院生の学生便覧の見直しである。

特に①については、昨年度から院生の講義中のツイッター使用が見受けられること、M2学生の実習期間中の学習室使用状況（規則外の要求）について問題となった。講義中のツイッターの件では入学時の情報管理（パソコン・スマートフォン等によるツイッターの使用と倫理性）の時間を設け学部生、大学院生全員に講義を行うことで合意を得た。

実習期間中の学習室の使用期間については課題研究発表まで期間を延長することで決着した。理由は課題研究に集中して取り組むためである。

②の学生便覧の見直しでは、平成24年度から学舎移転に伴い、住所の変更点でのみある。

### 1-13-1 大学院生（M2）の就職支援ワーキンググループ（WG）

構成員：宮崎文子（責任者）草間朋子、山西文子、今井秀樹

目的：院生の就職に関する相談（特定看護師：仮称）に応じ、学生のニーズにそって就職先を支援する。

（1）2011年5月11日M2の卒後進路希望調査実施。その結果、国立病院機構の病院12名、機構以外の病院3名、未定3名、計20名であった。

今後の活動として、就職先未定者及び国立病院機構以外の就職予定者8名を対象に、どのような形で就職したいのか（特定看護師か、看護師か）、どのような病院に就職したいのか、希望の就職地・場所等について院生と面談の日程の調整を行いながら就職支援を進めた。

（2）2011年12月2日希望就職先調査実施。その結果就職決定者19名、未定者1名となった。内訳は、国立病院機構13名、その他の病院6名、決定者は全員特定看護師（仮称）で働きたい意向を示した。

12月現在、就職未定者1名については、院生の要望に沿うように努力をし、2012年2月本人の希望する病院に就職が決定、ここに20名全員の就職が決定した。

（3）特定看護師（仮称）業務試行事業説明会の実施について

\*1月19日：特定看護師（仮称）業務試行事業の内容を理解していただくために、国立病院機構以外の病院で就職を受け入れる6か所の病院を対象に行った。出席者17名（病院の管理者、医師、看護師）であった。

\*3月6日：国立病院機構以外の病院を対象に、「看護師特定能力認定制度」に関する最近

の動向、本大学院のカリキュラムの説明と今後の連携体制及び意見交換である。出席者は11名であった。

(4) 就職決定者20名の就職先：国立病院機構13名、その他の病院7名である。

## 2、 学内行事の概要

### 2-1 学年歴

#### 【 前 期 】

#### 4月

- 1 新入生ガイダンス
- 2 入学式
- 4 学内オリエンテーション
- 5 健康診断
- 8 前期 Semester 授業開始

#### 5月

23～11 / 11  
看護学研究科病院実習

#### 6月

- 10 スポーツ大会
- 20～27 基礎実践統合実習

#### 7月

- 22～28 看護体験実習
- 31 オープンキャンパス

#### 8月

- 8 夏季休業開始

#### 【 後 期 】

#### 10月

- 2 看護学研究科入学試験
- 25 大規模災害訓練

#### 11月

- 5・6 大学祭（全学行事）
- 13 指定校・公募制推薦入学試験

#### 12月

- 1 創立記念日
- 12～16 看護体験展開実習
- 24 冬季休業開始

#### 1月

- 10 冬季休業終了
- 23～27 各論実習Ⅰ
- 30～ 2 / 13 各論実習Ⅱ

#### 2月

- 4 一般前期試験
- 18 一般中期試験
- 20～24 臨床判断実習



## 2-2 オープンキャンパス

7月31日（日）国立病院機構キャンパスにおいてオープンキャンパスが実施され、受験生、父母等を併せ、547名の参加があった。

なお、オープンキャンパスの概要は下記のとおりである。

### 第1会場 国立病院機構本部講堂

全体講演会 9:30～14:40 2回に分けて実施

【内容】 ①東が丘看護学部の理念・教育方針 ②カリキュラムとキャンパス紹介  
③東が丘キャンパスライフ（学生による体験談） ④入試概要説明  
個別相談会 ①入試相談 ②東が丘看護学部個別相談、医療保健学部個別相談 ③就職・奨学金・学生寮相談

### 第2会場 本館1・2階

【体験コーナー①】（1階）小児看護学体験：赤ちゃんの体温と脈拍を測ろう！赤ちゃんを抱っこしよう！

【体験コーナー②】（1階）老年看護学体験：高齢者体験キットを装着して、活動してみよう。

【在学生と話そうコーナー】（2階）在学生と自由に話し、交流を図る

### 第3会場 第1別館2階 大学院看護学研究科

【体験コーナー①】技術体験：シュミレーターを用いた技術体験

【体験コーナー②】授業体験：高度実践看護コースの模擬授業

看護学研究科高度実践看護コースの相談及び高度実践助産コースの紹介

### 第4会場 実習病院見学：東京医療センター

病院の説明の後、午前中2回、午後1回、5グループ、1回30分程度で、5回に分けて、東京医療センターの看護職スタッフの案内により、病院見学を実施した。

## 2-3 公開講座

平成24年3月13日、看護学研究科主催による公開講座を開催、大学院生をはじめ看護師、大学教員等学内外から115名の参加があった。

この公開講座は、米国スタンフォード大学病院の救急医療現場でナースプラクティショナーとして活躍している Chan. Garrett 氏が来日した機会に、「急性期のナースプラクティショナーの過去、現在と未来の役割」と題した講演を、逐次通訳により実施したもので、米国における急性期のナースプラクティショナーの活動実際を知る良い機会となった。

## 2-4 学友会活動

### 1) スポーツ大会

学友会の全学行事である、スポーツ大会が6月10日（金）に、駒沢オリンピック公園内屋内球技場で開催され、東が丘看護学部からは149名が参加し、バレーボール、フットサル等の競技に参戦するとともに、大会役員として他学部の学生（教職員）と一緒にスポーツ大会の運営に協力した。

### 2) 大学祭（医愛祭）

全学行事である大学祭が11月5日（土）・6日（日）に世田谷キャンパスで開催された。東が丘看護学部では、他学部の学生と一緒に模擬店を出店、茶道同好会が「看護の心⇒茶道の心」をテーマにお手前を披露、音楽サークル「Da Capo」やバンドサークル「肉ガール」によるコンサートも行った。

さらに、学科別企画として、東が丘看護学部紹介の部屋を設け、パネル展示や教員による学部・看護学研究科のPR活動を行った。

## 3、 教育活動

### 3-1 平成24年度入学者選抜状況

#### 概要

看護学部看護学科及び大学院看護学究科の入学者選抜の概略は以下のとおりである。

#### 1. 看護学部看護学科

##### 入学者選抜試験の概略

試験区分	試験日	定員 <sup>Ⓐ</sup>		志願者数 <sup>Ⓑ</sup>		受験者数 <sup>Ⓒ</sup>		競争倍率 <sup>Ⓒ/Ⓐ</sup>		合格者数		入学者数	
		( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
指定校推薦入試	11月13日(日)	(15)	15	(13)	12	(13)	12	(0.9)	0.8	(13)	12	(13)	12
公募制推薦入試	11月13日(日)	(10)	10	(24)	51	(24)	50	(2.4)	5	(16)	13	(16)	13
センター試験利用入試 前期	1月14日(土)・ 15日(日)	(15)	15	(297)	514	(296)	513	(19.7)	34.2	(92)	89	(43)	4
一般入試 前期	2月4日(土)	(45)	45	(465)	577	(453)	525	(10.1)	11.7	(101)	100	(51)	43
一般入試 後期	2月18日(土)	(10)	10	(208)	205	(197)	184	(19.7)	18.4	(10)	47	(8)	24
センター試験利用入試 後期	1月14日(土)・ 15日(日)	(5)	5	(17)	26	(17)	26	(3)	5.2	(5)	12	(3)	13
合計		(100)	100	(1,024)	1,385	(1,000)	1,310	(10.0)	13.1	(237)	273	(134)	109

(名)

○ 推薦入試

1) 指定校推薦入試

(1) 対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成 24 年 3 月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が 3.5 以上の者

(2) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜した

2) 公募制推薦入試

(1) 対象

本学を第一志望する（専願）とし、下記①と②に該当する者

①平成 24 年 3 月に高等学校卒業見込みで、高等学校長の推薦がある者

②高等学校における全体の評定平均値が 3.5 以上の者

1) 選抜方法

調査書・小論文・面接を総合的に評価し選抜した

○ 一般選抜

1) 一般入学試験 前期・後期

(1) 一次試験科目

必須科目 英語 I・II (100 点)

選択科目 国語総合【現代文のみ】、数学 I・数学 A から 1 科目選択

生物 I、化学 I から 1 科目選択

2) センター試験利用入学試験 前期・後期

(1) 一次試験

必須科目 英語【リスニングを含む】(150 点)

選択科目 国語【近代以降の文章】、数学 I・数学 A から 1 科目利用。【2 科目以上受験している場合は高得点のものを利用 (100 点) 生物 I、化学 I から 1 科目利用 【2 科目以上受験している場合は高得点のものを利用 (100 点)】

## 2. 大学院看護学研究科

### 入学者選抜試験の概要

#### 高度実践看護コース

入試区分		試験日	定員 <sup>④</sup>	志願者数 <sup>⑤</sup>	受験者数 <sup>⑥</sup>	競争倍率 ⑥/④	合格者数	入学者数
第1次募集	推薦入試	10月2日(日)	20	(16) 7	(16) 7	(-) -	(15) 7	(15) 7
	一般入試			(12) 11	(12) 11	(-) -	(7) 9	(6) 9
第2次募集	推薦入試	12月11日(日)	若干名	(-) 6	(-) 6	(-) -	(-) 6	(-) 6
	一般入試			(-) 3	(-) 3	(-) -	(-) 0	(-) 0
計			20	(28) 27	(28) 27	(1.4) 1.4	(22) 22	(21) 22

#### 高度実践助産コース

入試区分	プログラム	試験日	定員 <sup>④</sup>	志願者数 <sup>⑤</sup>	受験者数 <sup>⑥</sup>	競争倍率 ⑥/④	合格者数	入学者数
第1次募集	免許取得	12月11日(日)	10	(-) 5	(-) 5	(-) -	(-) 5	(-) 5
	助産師			(-) 2	(-) 2	(-) -	(-) 2	(-) 1
第2次募集	免許取得	2月12日(日)	若干名	(-) 0	(-) 0	(-) -	(-) 0	(-) 0
	助産師			(-) 2	(-) 2	(-) -	(-) 2	(-) 2
計			10	(-) 9	(-) 9	(-) 0.9	(-) 9	(-) 8

#### ○ 選抜方法

筆記試験、面接及び出願種類を総合して判定

##### 1) 筆記試験

看護学に関する総合的な基礎知識を出題する。

必修問題2問、選択問題3問から1問を選択。試験時間120分

##### 2) 面接試験

一人15分程度

### 3-2 科目の教育活動（学部）

#### 【看護基盤学領域】

##### 教育方針

看護基盤学領域は、将来看護師となる人として必要な教養，知識のみならず専門にこだわらない広い視野に立った物の見方を学ぶために重要な分野の教育を担当している。同領域に所属する教員の出身学科は看護学科のみならず多岐に及び、その長所を生かして人間の生命を自然科学的，倫理的，あるいは社会的等，多面的な側面より論じる能力を有する看護師育成を目指す。さらに社会医学分野の講義や臨床検査学演習および臨床薬理学演習等を通じて、スキルミックスやチーム医療の重要性を教授することにも力点を置いている。

##### 科目の教育活動

##### 基礎分野

##### 1) 国際関係論

##### 1 年次後期

日比野守男

文系学部・学科で一般的に取り上げられる国際関係論と違い、本講義では学生が将来医療職等を目指すことを踏まえ、医療や介護をはじめ年金、少子化など社会保障制度全般について国際的な観点からとらえることを目標とする。これに沿って内外の政治、経済情勢などを踏まえながら、先進国共通の社会保障制度の課題、欧米とわが国との比較、わが国の今後の社会保障制度のあり方などについて、具体的な事例を織り交ぜながら概説し、世界の中におけるわが国の社会保障制度の特徴を浮かび上がらせる。また、エイズ、ハンセン病などの医療をめぐる差別問題や薬害問題も各国との比較で取り上げる。

世界の社会保障制度を知るには日本の制度を知らねばならない。そこでまず、わが国の制度について分野別に概説したうえ、同じ分野における海外の動きを紹介し、それぞれの国の制度の違いと共通性を理解してもらうように努めた。一般に社会保障制度は重要だが分かりにくい。それを補うために関係する新聞記事を随時紹介し、少しでも身近に感じてもらえるようにした。次年度も、世界の動き、社会との動きの中で社会保障を多面的・複眼的に理解してもらえるように工夫したい。

##### 専門基礎分野

##### 1) 解剖生理学 I

##### 1 年次前期

伴信彦、今井秀樹

本科目では呼吸器系、血液系、循環器系、泌尿器系、消化器系について、正常構造と機能に関する基本知識の習得を目標とした。学生を少人数のグループに分け、各回の担当グループによる発表の後、教員が補足説明を行い、次の回に関連内容の小テストを実施するという授業形式をとった。開講期間に比して学習すべき内容が膨大であるため、学生は消化不良気味で、発表形式の授業も当初期待したような効果をあげることができなかった。学生の自学自習をどのような形で促すかが、次年度の課題となる。

## 2) 解剖生理学 II

### 1 年次前期

伴信彦、今井秀樹、小宇田智子

本科目では筋骨格系、神経系、内分泌系、生殖器系、感覚器系について、正常構造と機能に関する基本知識の習得を目標とした。授業の進め方および次年度の課題は、解剖生理学 I と同様である。

## 3) 疾病と治療IV

### 2 年次前期

齋藤史郎、宮崎文子、伴信彦、金子あけみ

本講では泌尿器系、生殖器系、内分泌系の器官における病態生理、診断（検査を含む）、治療方法、特徴的な症状と経過等についてパワーポイント、プリント、テキストを用いた講義を行った。

疾病に対する理解を深めるには、解剖生理学が前提となるため、基礎的知識を確認しつつ、講義を進めた。

また、実践的でリアリティのある講義とするため、実際のインスリン注射器に触れたり、DVD や人体モデル等の視覚教材を用いた。

次年度は担当教員間の連携を深め、より体系的な授業となるよう工夫していく。

## 4) 臨床薬理学演習

### 2 年次前期

小宇田智子、伴信彦、近藤直樹

1 年次生で学習した臨床薬理学の知識をもとにして、薬物動態や作用と薬効、全身麻酔薬、パーキンソン症候群治療薬、抗炎症薬、抗がん剤の薬物療法の展開について、グループごとに自主学習および発表の時間を設けた。発表内容について学生同士で自由に議論を行い、その中で互いに知識を深めていくように工夫した。その際、学生の間で話題の上がらな

った内容などについて補足説明を行った。また、実際に医療現場で薬剤師として勤務している非常勤講師により、薬理学の復習や医療現場の現状を講義して頂き、より実践の場に必要な知識を学ばせることが出来た。

## 5) 疫学と保健統計

### 2年次後期

小宇田智子、今井 秀樹

健康上の問題を解決するための、世界や時代の動きを統計的なデータを用いて理解できるよう、オリジナルのパワーポイントと教科書を用いて授業を展開した。疫学および保健統計学の概念とデータ分析の方法を理解し、公衆衛生に関連する統計情報から、地域看護の展開に役立てるための基礎的能力を養うことを目的とし、疫学的な考え方ははじめとして、疾病の原因と疫学的な因果関係の考え方、疾病の頻度の表し方、曝露の効果を表す指標として相対危険や寄与危険、さまざまな疫学研究、スクリーニング検査、臨床疫学、政策疫学、遺伝疫学、健康の指標等について講義した。また、授業の最後に国家試験対策およびその日の授業内容の確認のために小テストを毎回行い、理解が深まるよう工夫した。次年度も構造化した授業を展開していきたい。

## 6) 医療・看護情報学の基礎

### 2年次前期

小宇田智子、佐藤潤

看護研究に必要である統計学的な基礎的知識を身につけるため、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。研究により得られたデータの処理、および統計学的な考え方や実際の統計処理について講義し、正しいデータの解釈の仕方を理解できるように構造化した授業を行った。具体的には統計学の基礎的な考え方、実際の数値を用いたデータの推定や検定の方法について作製した資料を配布した。最終的な試験により学生の理解度を検討し、次年度以降の授業に役立てて行く予定である。

## 専門分野

### A 基礎看護学

#### 1) 家族看護学

##### 2年次前期

金子あけみ、大野佳子

家族の健康、役割機能、発達段階から家族を構造的に捉える視点を教授した上で、家族

看護学の基盤となるさまざまな理論の概要について講義を行った。次に、家族看護の実際として、家族アセスメント、介入の基本を理解するため、ジェノグラム・エコマップの書き方について講義を行った。これらの講義は教科書やオリジナルのスライドの他、具体的な家族事例について示す等、イメージ化しやすいよう配慮した。

さらに、グループワークで「家族劇」の製作・発表を行った。家族劇の製作過程を通して、患者本人の苦悩と家族の苦悩について理解するとともに、家族システムとして家族員相互が影響を及ぼし合っていること、病は家族全体に影響すること、家族間の関係は直線的な因果関係よりも円環的な見方がよりよく理解できること等を体験的に学習できるようにした。

来年度も講義と家族劇の製作・発表を継続して行うが、家族劇の製作についてはもう少しゆとりをもたせるよう時間配分を工夫したい。将来、看護師として、患者本人だけでなく家族も視野に入れた温かい看護ケアができるようインパクトのある授業展開を心がけたい。

## F 研究

### 1) 看護研究

#### 2 年次後期

草間朋子、伴信彦、今井秀樹、金子あけみ、小宇田智子、佐藤潤

看護における研究の意義、文献検索、研究の種類、倫理的配慮、成果のまとめ方等について講義を行い、看護実践と研究とのつながりについての理解を深めた。看護実践・研究の両面で初学者の2年生が対象であることを考慮し、できるだけ具体的な事例に沿った説明を展開するようにした。次年度は担当教員間の連携を深め、より体系的な授業となるよう工夫していく。

## H キャリア形成

### 1) 看護専門職論

#### 2 年次後期

金子あけみ、坪倉繁美

専門職としての看護職の歴史的変遷、看護制度、看護教育、看護実践に係る倫理等について講義した。講義に際し、看護職が専門職をめざし制度、教育等の側面でこれまで歩んできた歴史的変遷については、DVDを活用し、当時の看護師の姿や時代背景を視聴することで臨場感をもたせる講義とした。

また、専門職化(professionalization)、専門化(specialization)、自律性(autonomy)、責務(accountability)等のキーワード及び提示した研究論文から看護専門職としての意味を考察するよう課題を与えた。



さらに、グループ演習を行い、看護教育制度や免許制度、看護師の給与等、学生が関心を持ち、自ら選択したテーマについて現状を分析させ、望ましい看護専門職としてのありようを討議する機会を設定した。

まとめにおいては、特別講師を招聘し、看護師の「切り事件」を題材に、専門職性、生涯教育、倫理的側面からの考察を行った。

来年度についても講義、グループ演習を組み合わせ、学生自らが看護専門職として自覚し、自らの意見を持てるような教授内容としたい。

## 【基礎看護学領域】

### 教育方針

本領域においては、基礎看護学領域における看護や人間の考え方を踏まえたうえで、看護実践能力の基盤となる看護技術力や判断力、問題解決力を養うことを目指し、講義・演習・実習を展開する。具体的には、人間の生活の特徴を理解し、統合体としての人間に関する情報を的確に収集する力、その情報を看護学的な視点から分析・判断し看護上の問題や課題を導く力、一つひとつの看護技術のもつ科学性や安全性、安楽性や倫理性を追求しつつ問題や課題の解決に向け対象の個別性に応じた看護技術を提供する力、常に自らの看護技術やその提供過程を評価し、「何故そうするのか」「何が最善か」を自問自答していける力を、それぞれの科目の学習内容を有機的に関連付けながら教授・学習できるようにする。また、看護学の学習の導入となる領域として、学生が看護の奥深さや楽しさに触れると同時に、専門的な学習への動機づけとなるような授業展開を探求していきたい。

### 科目の教育活動

#### 専門分野

#### A 基礎看護学

##### 1) 看護体験実習

##### 1 年次前期

穴沢小百合、宮崎文子、松山友子、吉満祥子、竹前良美、土田由美、今井真喜、鶴巻香奈子、早坂奈美、雛田雅代、田中志穂、諸原純子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、病棟、手術室、外来の18看護単位に学生を配置した。医療現場の看護・人間・健康・環境について実習施設での見学および指導者からの説明を通して学習をすすめ、カンファレンスや実習記録・レポートの記述、等を通して学習した内容を整理した。今年度は病棟毎のカンファレンスに加え、全体でのまとめを行った。全体でのまとめでは、実習目標に対して学生が学んだことを発表し、発表内容と実習目標を関連づけてヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を参考に内容の定着を意図した説明を行った。学生からは全体会によって学習内容

が深まったとの声が聞かれた。さらに、実習最終日には「人間を統合体として理解する重要性」「看護職の役割と重要性」をテーマに学習した内容について発表して意見交換を行った。本実習は見学が中心であり、見学内容を教員が教材化して指導する必要がある。次年度は、全体会および発表会の一層の充実を図りたい。また、看護学生として初めての実習であるため、学生が身だしなみや挨拶、時間厳守、健康管理といった基本的な事項を意識的に整える指導を継続して実施していく。

## 2) 看護体験展開実習

### 1 年次前期

穴沢小百合、宮崎文子、松山友子、竹前良美、土田由美、小嶋奈都子、中村裕美、鶴巻香奈子、早坂奈美、雛田雅代、田中志穂、諸原純子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、15 病棟に学生を配置した。実習施設における看護実践の見学および指導者からの説明を通し、患者の情報収集の方法、日常生活上の問題を特定し援助計画を立案・実施する過程について学習し、カンファレンスや実習記録・レポートの記述、等を通して整理した。今年度は講義・演習科目と実習との関連を重視し実習を計画した。昨年度に引き続きフィジカルアセスメントで作成した「看護理論に基づいた系統的観察項目」を情報の整理に活用すると共に、今年度より「個別性に応じたバイタルサイン観察」について事前に学習し、これを活用してバイタルサイン観察を実践した。これにより、バイタルサイン測定に関する課題は残るものの、情報収集の方法および患者の個別性に応じ看護技術を提供する方法について理解を深めることができた。また、指導方法の充実を図るため、『実習指導の要点』を指導担当教員および実習指導者向けに作成しこれに基づいて指導を進めた。実習指導者からは一貫した指導ができると好評であり、今後も臨床と大学の連携による充実した実習の展開をめざしたい。

## B 臨床看護技術学

### 1) フィジカルアセスメント

#### 1 年次通年

穴沢小百合、松山友子、吉満祥子、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

対象の健康問題を把握するために必要な看護技術であるフィジカルアセスメントについて、観察の基礎知識、バイタルサイン観察、フィジカルアセスメントの基本技術、器官系統別(消化器、呼吸器、循環器、運動器、頭頸部・神経系)の観察について、前提科目の事前学習を促しつつ教授した。器官系統別のフィジカルアセスメントを強化するため、学生が系統的かつ主体的にフィジカルイグザミネーションを学習するためのシートを作成し、その活用を促した。演習では簡単な状況設定を行い、問診から視診・触診・打診・聴診とそ

の結果のアセスメントという一連の過程が学習できることに加え、看護者として患者への説明と同意、患者の準備・環境調整を行い、患者への倫理的配慮や安全安楽の配慮をしつつイグザミネーション実施することを重視して指導した。演習後の振り返りでは、学生からイグザミネーションの技術の改善点だけでなく患者への配慮や説明の不十分さが課題として挙げられており、意図的な指導の成果と言える。しかし、技術的には継続的に反復練習を必要とする状況であり、それをいかに促進していくかが今後の課題である。

## 2) 臨床判断論

### 1 年次後期

吉満祥子、松山友子、穴沢小百合、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

生活過程を整えるための援助場面における臨床判断の視点とそれに基づく援助方法を学ぶことを目的に、排泄の援助を例に授業を展開した。V.ヘンダーソンの理論を活用し、ニードの充足状況の判断の視点や、援助を実施するために必要な基礎知識・技術を中心に講義・演習を行った。また、事後課題として、清潔の援助が必要な患者の事例を提示し、臨床判断実習とほぼ同様の記録用紙を用いて、事例患者における未充足のニードの根拠や援助計画の立案を課した。自ら、事例患者の体力・意思力・知識の3側面から未充足のニードの根拠を考え、援助計画を立案することを通して、個別性に合った援助計画を立案することの難しさや自らの理解度を確認することにつながったと考える。また、先にある看護学実習を意識しながら援助計画を立案することで、より熱心に事後課題に取り組むことができたと考える。しかし、学生の理解度には個人差が見られたことから、授業方略を検討する必要がある。学生から「グループワークの時間増やして欲しい」という要望があったことから、次年度は、グループワークを活用して、学生の理解を促進できるように検討する。

## 3) 看護実践技術論

### 1 年次前期

松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、高野律子、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

看護技術の基本的な成り立ち及び人間の生活の特徴に関する理解に基づき、様々な状況にある人間の生活過程を整えるために必要な看護技術を学ぶことを目的として授業を展開した。看護技術の基本的な成り立ちについては、人間の生活過程の特徴や基本的ニードを理解し、安全と倫理に配慮しつつ科学的根拠に基づく看護技術を提供する意義や看護職が専門的な視点から人間の生活過程を整える意義を学習した。また、看護技術に関する基本

的な考え方を踏まえ、看護場面に共通する技術（コミュニケーション、感染予防、ボディメカニクス）や人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境調整、活動休息・衣生活・食事・清潔を援助する技術）について、講義やグループワークを通して学習した。事前課題として、学生自身が患者役として生活を体験する課題を設定したことにより、対象の状況や援助の意義を実感として理解でき授業の導入に有効であった。今年度は、領域内3科目の講義・演習が混在しないように、單元ごとにまとまりをつけて授業を配置したことにより、学生の混乱は殆ど見られなかった。次年度も授業配置を工夫していきたい。

#### 4) 看護実践技術展開論Ⅰ

##### 1年次前期

吉満祥子、松山友子、穴沢小百合、高野律子、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

生活行動を営む人間の一人ひとりの状況や健康状態を適切に判断し、それに応じた援助方法の決定や実践の展開ができるための基礎的な能力を養うことを目的に授業を展開した。看護実践技術論を踏まえ、人間の生活過程を整えるために必要な基礎的な看護技術（療養環境の調整技術、活動休息・衣生活・食事・清潔を援助する技術等）の習得に向け、看護技術演習を実施した。各看護技術の典型事例の援助過程を通し、技術の原理・原則を理解して実施することに加え、専門的視点による観察、安全・安楽への配慮、患者への倫理的配慮を具体的な行動レベルで理解することをめざし、教授活動を行った。学生は、講義と演習を組み合わせることで学習することや、演習後に自らの技術提供過程を自己評価することにより、一つひとつの技術への理解が深まったと評価していた。しかし、演習の時間内だけでは技術の精確化の段階までの習得には至らないため、自己学習を進めやすいように練習用教材を設置する等の環境作りを強化した。この試みにより、前年度に比し自己学習に取り組む学生は増加したが、依然として自己学習の定着化や技術力向上に向けた練習方法に課題が残った。引き続き、正確な知識・技術の習得に向けた自己学習の促進・定着を課題としたい。

#### 5) 看護実践技術展開論Ⅱ

##### 1年次後期

穴沢小百合、松山友子、吉満祥子、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

医療現場に必須の看護技術であり、より高い倫理性と正確性、安全性が求められる診療の補助技術について、無菌操作、与薬、注射、静脈血採血の技術を中心に教授した。また、清拭と寝衣交換を必要とする点滴中の患者の事例を提示し、援助計画の立案とそれに基づ

く実施・評価を行った。これにより、日常生活援助と診療の補助技術との統合を図る機会となった。演習指導では、より実践的な授業展開をめざし筋肉注射、点滴静脈注射の演習に自作の教材を作成し活用した。例えば点滴静脈注射では、三方活栓付きの輸液ラインを前腕部に刺入・固定してある滴下可能なモデルを作成した。このモデルを使用して、三方活栓の構造や操作法の理解、側管注の方法および点滴の滴下調節を指導した。学生からは「三方活栓を自分で操作し、輸液の流れが目で確認できた」「自分たちで考えながら実施したので発見することが多くあった」などの意見があり、効果的であったと考えている。一方、モデルの固定の不十分さや学習時間の不足など改善点に関する意見もあり、今後の課題としたい。実践的な授業展開は技術の手技だけでなく、患者への倫理的配慮、安全安楽の配慮などを統合した看護提供の学習が重要であるため、今後も検討を重ねたい。

## 6) 臨床判断実習

### 1 年次後期

松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、竹前良美、土田由美、小嶋奈都子、中村裕美、早坂奈美、雛田雅代、田中志穂、諸原純子、太田恵子、落合雅美、楠見和子、高橋智子、中村勝喜、那須野順子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、15 病棟に学生を配置した。1 名の患者を受持ち、基本的ニーズの充足状況の判断に基づき援助を実践することを通し、学内で学習した日常生活援助に対する知識・技術・態度の統合・向上をはかることを目的とした。学生は、患者のニーズの充足状況を踏まえ、個別性に応じた援助の提供を目指して、援助計画を立案し、その計画に基づき実施と評価を日々行った。5 日間の実習期間の中で、学生は患者の反応を的確にとらえ、個別に応じて援助することの難しさを実感すると共に、その必要性や重要性を学習し、実習終了時には看護師が日常生活援助を行う意義を自らの言葉で述べ、今までの学習を深化させていた。学生にとって一年間の集大成として、また、今後の看護学の学習に対する意欲の喚起につながる実習となったと考えている。本実習は、同時期に 134 名の学生が日常生活援助を中心とした実習を行うことから、実習施設と実習環境や指導体制に関する検討を重ねてきたが、『実習指導の要点』をまとめた資料の活用もあり、双方の連携が円滑に行われた。次年度も継続的に連携を図り、実習指導を充実させていきたいと考えている。

## 7) 基礎実践統合実習

### 2 年次前期

松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、竹前良美、土田由美、今井真喜、鶴巻香奈子、早坂奈美、雛田雅代、牧栄理、諸原純子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターを実習施設とし、15 病棟に学生を配置した。

本実習では、「看護過程と看護方法論」の授業で学習した知識・技術および態度を活用し、一人の受持ち患者の看護過程を展開することを通し、個別性に応じた必要かつ適切な看護を実践するための基礎的能力を養うことを目指した。学生は、受持ち患者の情報をアセスメントし、患者の全体像をとらえた上で、これまでの学習で対応可能な看護上の問題点を 1 つ選択し、その問題に焦点を当てて看護計画の立案・実施・評価を実施した。2 週間の実習期間の中で、学生が既習の学習内容と実践の具体例との統合的な理解を効果的に深めていくために、看護過程の展開の進行に沿ったテーマカンファレンスや主として方法論的な理解の促進をねらった全体カンファレンスを組み合わせて設定した。これによって、学生は日々思考を整理・深化させることができたと評価していた。また、実習指導者と担当教員との連携を強化し、指導方法の充実を図るために、『実習指導の要点』を作成し、これに基づいて指導を進めた。実習指導者からは、日々の指導の視点や方向性が明確になり、指導もしやすいとの意見であった。今後も、実習指導者や担当教員の意見を反映させ、効果的な指導を検討していきたい。

## C 医療臨床実践看護学 I

### 1) 看護過程と看護方法論

#### 1 年次後期

松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、竹前良美、土田由美、田中志穂、諸原純子

看護過程は、看護の対象となる人々の個別性や状況に応じ、科学的に看護を実践するための方法であることを踏まえ、本授業は「看護過程の概要とその活用の意義」「看護過程の展開方法」「看護記録」「質の高い看護の提供に向けた看護過程の活用の現状と課題」で構成した。具体的な看護過程の展開方法については、看護過程の 5 段階を、さらに 11 のステップに分け、ステップごとに「基本的な知識の講義」→「事例展開の課題（個人課題）」→「課題のサンプル例の提示と解説」というパターンで講義・演習を展開した。学生は、課題が大変であったが、事例展開を自分で実施しながらステップを進めたので理解ができたとの反応であった。本年度は、冊子にまとめた講義ノートその他、事例も冊子にまとめて事前に配布した。これらの冊子は、自己学習の際に役立ったとの意見が多数聞かれた。また、昨年度の評価を参考に、グループによる意見交換の時間を増やした結果、学生間で学びを共有できたという意見を得られた。しかし、特に授業前半のアセスメント段階での疑問点や不明点が多く見受けられたため、次年度は授業前半のグループ学習を検討したい。

## 【成人・老年看護学領域】

### 教育方針

成人・老年看護学領域における医療臨床実践看護学では、健康障害の経過にもとづく看護を「クリティカルケア看護」「リハビリテーション看護」「セルフコントロール支援論」「終末期看護」「クリティカルケアの探究」「終末期ケアの探究」「長寿健康援助論」「長寿看護実践論」として各1単位で構成し、それぞれの科目において臨床実習2単位を展開している。各科目では、人間・健康・生活を基盤とした教育内容を展開する。具体的には、成人・老年期における人の健康問題を理解するための基礎的な知識をベースにし、さらに統合して理解するための理論とその背景について、講義や演習をまじえて学生に分かりやすく理解を深められるようなカリキュラムを実施していく。また、学生が自ら学ぶための学習動機と学習方法を啓発する。

これらの学習内容を基礎にして、科学的な思考とかけがえのない一人一人をとらえる人間観を兼ね備えた看護実践者としての能力を育成したい。

### 科目の教育活動

#### 専門分野

#### A 基礎看護学

##### 1) 看護におけるコミュニケーション

##### 2 年次前期

古都昌子、雛田雅代

2年次生の94名が選択し、3度の基礎実習を経てコミュニケーションの学習ニーズの高さを実感した。講義前アンケートによってコミュニケーションにおける学生の傾向、学びたい内容を把握し、学習ニーズをふまえた講義展開に努めた。

講義内容は、「聴く」・「話す」・「説明する」の技術について、陥りがちな課題に焦点を当て日常生活版、臨床実習版など、学生の遭遇する場面から考える展開とした。ミニワークや教員によるロールプレイで場面における考え方、あり方を学生とともに考える講義形式や、ディベート討論会を設定した。また、講義ごとにリフレクションシートを配布し、振り返りによって、学生の自己表現を促した。講義を通じてコミュニケーションが上手くいくことのみにとらわれず、相手の立場に立って自分らしいコミュニケーションを模索する必要性に気づけるように進めた。講義終了後アンケートでは、開講期間中の実習の際に今までの講義をふまえて場面を工夫し、効果が得られた学生やコミュニケーションへの前向きな意見が複数みられた。今後も、学生の目線から考え、学生個々のコミュニケーションスタイルを確認する時間となるように実践型のワークを取り入れながら教授したい。

## C 医療臨床実践看護学 I

### 1) クリティカルケア論

#### 2 年次前期

浅野妙子

急性期－クリティカル－とはどのような状態であるか、また、クリティカルな状態で人がおかれる環境について考えられるよう講義を導入した。その上で急性期における人の生体反応および呼吸・循環を中心とした重要臓器の機能障害について、解剖・生理・病態治療学等の既習内容にフィードバックしながら具体的に事例を用いて説明した。その際、そのような状況におかれた人のとらえ方、看護者としての看護の視点を強調し、医療における協働、倫理的配慮についても触れつつ講義を進めた。また、人の心理社会的側面における科学的な理解と説明のためにストレス・コーピング、危機理論等を用いた。

さらに、周手術期の事例（家族の反応を含む）を提示し、手術前・中・後を通して一人の人が一貫して全人的看護を受けるために看護師が行なうべき援助についてグループで学習することで、具体的な理解を促し、主体的に学ぶことへの興味を引き出した。この事例から、呼吸管理に関する演習を行った。

次年度は、視聴覚教材を多く用いてリアリティーをもたせながら、科学的な思考、判断から具体的な看護援助までのつながりを学べるよう工夫したい。

### 2) 終末期看護論

#### 2 年次前期

坂本祐子、今井真喜

人生の終末を生きる人の体験について、学生の関心を高められるように、書籍や DVD を活用した。

その人らしく生きることを支援するために、終末期に多い看護問題の解決に必要な基礎的知識を教授した。また、事例を提示し、学生同士で話し合い援助計画を立案させ、事例にあった計画であったか評価する時間を設けた。家族の援助の必要性についても考察する時間を設けた。

授業を自らの死生観を振り返る機会とするために、学生に生と死を考えるための課題を提示し、学生同士で話し合う機会を設けるなどの方法を用いた。

学習内容の振り返り用紙やリアクションペーパーを活用し、学生の自発的な学習をサポートできるように工夫した。また、資料やスライドも学生のリアクションをふまえ、オリジナルな内容を作成して授業を行った。

来年度は、学生がより学生の反応を生かし、学生自身で考える機会をふやせるように授業を工夫していきたい。



### 3) リハビリテーション看護論

#### 2 年次後期

石川倫子、今井真喜、雛田雅代、水口薫、古村ゆかり

リハビリテーション看護の目的を理解した上で、リハビリテーション看護を必要とする対象の理解、生活の再構築への支援を教授し、その具体として運動機能・神経機能を障害している患者の看護を授業展開した。授業方法では学生の体験を活かし、新たな知識と結び付いて学べるよう授業方法を工夫した。特に専門基礎分野で学んだ解剖生理学や疾病と治療の知識を活用し、対象理解につなげた。運動機能・神経機能を障害した患者への移動や食事への支援における技術演習を行ったことで、学生はそれ以前の学習内容を活用しながら演習を展開し、理解を深めていた。

今後の課題として、心臓リハビリテーションや呼吸リハビリテーションも教授しているが学習内容の精選をしていく必要がある。

### 4) セルフコントロール支援論

#### 2 年次前期

古都昌子、雛田雅代、鈴木美保

慢性期の特徴を理解し、生涯にわたり、セルフコントロールを要し、疾患とともに生きる対象の特徴およびセルフマネジメントの過程での支援方法の基本を学べるように臨床事例を用いて講義を進めた。セルフコントロールとは何か、患者の力を引き出すかわりに活用できる理論を紹介し、臨床事例と関連付けながら講義した。看護過程では、臨床での頻出事例として、成人期の糖尿病の2事例および腎不全の事例を用いた。事例展開においては、病態生理の基礎知識の小テストを行い、アセスメントに必要な知識を整理し、確認した。GWでの事例展開を進め、個人ワークにて学びを確認した。学生は、当初は、ゴードンの機能的健康パターンを用いた事例展開に戸惑いがみられたものの、健康知覚・健康認識の情報整理に重点を置き、全体像の理解から計画を立案し、14Gの全体発表によって共有した。また、学外講師として東京医療センター地域医療連携係長の鈴木先生を招聘し、退院調整・退院支援の実際について講義を受けた。今後は、セルフコントロール支援実習での実践へのつながりをより意識し、臨床事例を生き生きと捉える教材の工夫により、臨床状況下における判断と実践が学べるように工夫したい。

### 5) セルフコントロール支援実習

#### 2 年次後期

古都昌子、浅野妙子、雛田雅代

独立行政法人国立病院機構東京医療センターの4か所の病棟で、2週間の実習期間で実習した。実習生数は、各論1.2クールで2年次生39名が実習した。

病気とともに生きる慢性期の患者のセルフコントロールを目指し、全人的な対象理解に向けて学習を進め、生活における納得が得られるような支援を考える実習となった。情報にもとづくアセスメントの内容や援助方法の選択、カンファレンスの運営などについても、その都度、発問により、学生の思考や判断を引き出し、確認するようにした。

受け持ち患者の援助を通じて、病気とともに生きる慢性期の患者の特徴を理解するとともに、生活行動に着眼し、患者の状況に応じて患者とともに目標を設定していくセルフコントロール支援のあり方を学んだ。毎朝、指導者、担当教員と実習計画調整表を用いて、行動調整を行い、実践の機会を広げられるようにした。

受け持ち患者は1名が62歳でその他は後期高齢者であった。成人看護学実習ではあるが、今後も老年期の対象を受け持つことが想定される。成人期を対象に対する発達課題に応じた援助を考える機会を設定し、学びの充実を図る必要がある。

## D 医療臨床実践看護学Ⅱ

### 1) 成長発達各期の特徴と看護実践

#### 1年次後期

古都昌子、籬田雅代、今井真喜

発達を生涯発達の視点から理解し、成人期・老年期の特徴および、主に成人各期にある対象の健康問題と支援のあり方について理解が深まるように講義を進めた。

現代社会の現状について、国民衛生の動向や厚生白書によるデータ提示と内容に応じて歴史的推移をたどり、今の日本に何が起きているのか、成人各期の健康問題との関連について講義した。ワークシートや、ビデオ教材などにより、興味関心を高め、成人期の状況を現実の姿から視覚的に理解できるようにした。毎回、講義での学習内容に関連した国家試験問題と振り返り用紙の配布により、学びの確認の機会をもった。

昨年度の振り返りをもとに成人期の健康課題について、より主体的な学びをねらいとして、GWを取り入れた。成人期の健康課題の一つに着眼し、GWにて健康課題の原因や影響、今後の援助の方向性についてまとめ、発表会をもった。発表会では、青年期の食生活、壮年期の生活習慣病、更年期障害、メンタルヘルスなど、成人各期の多様な健康課題の現状理解と援助の視点の共有につながった。次年度もDV視聴覚教材や、具体的事例などを用いて、学生が、主体的に学び、対象理解が深まる学習となるように取り組みたい。

## 2) 長寿健康援助論

### 1 年次後期

浅野妙子

年輪と経験を重ねた存在である高齢者についてエリザベス・キューブラロス、エリクソン等の生き方を例に、その英知と加齢による身体的不利の共存について説明した。学生が、高齢者を取り巻く環境を身近に感じ、高齢者の身体的・精神的・社会的体験をより明らかにできるように社会学者の体験的著書を紹介した。

また、社会構造の変化・高齢化に伴う保健・医療・福祉制度の歴史的変遷および現在の少子高齢社会における課題について説明し、生き生きと生きる高齢者の健康的な生活を促進するヘルスケアシステムの活用と看護実践について講義した。高齢者のQOLを支え、高齢者の健康・自立を支えるための看護実践の具体例として、摂食・嚥下・口腔ケア・転倒・転落による事故の実態とその予防対策・リスクマネジメントについて演習をまじえて講義した。

次年度は、より多くの文献を紹介しながら、学生が自ら興味をもって高齢者から学べるような課題を検討する。この科目を通じて、学生は自らの老年観をもとに高齢者がおかれた状況を明らかにし、高齢者看護の役割について考え、さらに幅広い老年観がもてるよう働きかけたい。

## 3) 長寿看護学実習

### 2 年次後期

浅野妙子、古都昌子、金子あけみ、坂本祐子、松沼瑠美子、佐藤潤、小嶋奈都子、雛田雅代、早坂奈美、中村美幸、北原由紀、關口生陽子

独立行政法人国立病院機構東京医療センターの8か所の病棟と特別養護老人ホーム2か所で実習を行った。実習1クール2クールとも2週間の実習期間で行い、その内、1日を特別養護老人ホームで実習し、実習生数は2年次生98名であった。

高齢者とのかかわりを大切にしながら、実習指導者、担当教員からの助言およびカンファレンスなどによって学びを深めた。高齢者の特徴と健康障害のある高齢者に生じる変化との関連について、理解を深めながら、看護過程の展開を通じて全体像が理解できるように指導した。学生は、高齢者の健康障害に応じた看護について、受け持ち患者への援助を通じて、多くを学び、社会資源を活用した在宅、地域へのつながりへと視野が広がる実習となった。また、高齢の受け持ち患者とかかわる中で高齢者の可能性を実感し、高齢者に対するイメージの変化、新たな高齢者観につながる経験となった。特別養護老人ホームの実習では、実習日が1日と限られており、今後、保健医療福祉システムにおける施設の役割、機能について学びの充実を図る必要がある。

## G 看護マネジメント学

### 1) 医療安全学

#### 2 年次後期

古都昌子、雛田雅代、町屋晴美、田沼明子

医療における安全とは何か、安全文化の醸成に向けての専門職の役割を理解し、学生が医療安全に対する考えを明確にすることをねらいとして講義を進めた。日常生活に潜むエラーを確認し、自己のリスク認識やリスク感性を振り返れるように導入した。医療安全について論議されるようになった歴史的背景、取り巻く社会の現状、重要な用語の意味について講義した。また、安全文化の創造への取り組みとして学外講師として招聘した国立病院機構医療部サービス・安全課長の町屋先生、東京医療センター医療安全管理係長の田沼先生より、医療機関における安全対策、看護における安全対策について、講義を受け、実際の活動内容や生じている事例について理解を深めた。

さらに無資格者である看護学生の臨床実習における医療安全の考え方について講義し、臨床実習における自己の責任を考察できるようにした。後半は、インシデント分析法を紹介し、ヒューマンエラーの事例をGWによって抽出、分析し、発表の機会を持って共有した。

今後、学生が、医療安全の創造に向けた責務を自覚し、リスク認識、リスク感性が高まるように現実を想起したシミュレーションなどを工夫していきたい。

### 【小児看護学領域】

#### 教育方針

成育看護学（小児看護学）では、あらゆる発達段階および健康状態にある子どもと家族を理解し、小児看護が実践できる能力を養うことを目的としている。そのため、成育看護学（小児看護学）は、「成長発達と看護」および「成育看護論Ⅱ（小児の健康と看護）」、「成育看護実践論Ⅱ（小児の健康障害と看護実践）」、「成育看護学実習Ⅱ（小児看護学実習）」の科目で構成している。

さまざまな状況にある子どもと家族を理解するために、小児の臨床場面をより臨場感あるようにイメージし、思考でき、主体的に取り組めるよう、講義や演習では事例を用いて教授している。また、実習においては、日々のリフレクションや事例を用いたケースカンファレンスなどにより、学びの共有を図っている。

#### 科目の教育活動

## D 医療臨床実践看護学Ⅱ

### 1) 成長発達と看護

#### 1 年次後期

小村三千代、村川陽子、鶴巻香奈子

「成長発達と看護」では、子どもの成長発達の考え方を幅広くとらえ、成長発達が子どもに及ぼす影響や成長発達の促進、あるいは阻害要因を学ぶ、ことを目的としている。

そのため、講義内容は1) 成長発達とは、2) 新生児期から思春期における子どもの成長発達と看護、3) 子どもの成長発達評価と看護、4) 子どもに用いる発達理論と看護、を教授した。具体的には、新生児期から思春期における子どもの形態的成長や機能的発達、心理・社会的発達と子どもと家族の日常生活への援助、小児各期に起こりやすい健康問題を取り上げた。乳児期では乳幼児突然死症候群を、幼児期では感染症と不慮の事故、気管支喘息や虐待を、学童期では肥満やいじめ、不登校を、思春期では神経性無食欲症などに関して事例を用いて教授した。

学生は、小児各期の発達課題や健康問題について事例から具体的に考えることができ、学びを深める機会となった。子どもの成長発達評価と看護では、乳幼児発育曲線や指数を用いた評価方法、デンバー発達判定法などの発達評価について実習などで活用できるよう教授した。また、発達理論についてはボウルビィ、ピアジェ、エリクソンについて、学生が理論を用いて子どもと家族の現象が説明できることを目標に教授した。

## 2) 成育看護論Ⅱ (小児の健康と看護)

### 1 年次後期

小村三千代、村川陽子、鶴巻香奈子

成育看護論Ⅱは、子どもと家族の援助に必要な基礎的知識を理解し、小児各期の発達段階に特有な健康上の課題および、基本的な生活習慣の確立に向けた援助方法を学ぶことを目的としている。

そのため、講義内容は1) 子どもの権利、2) 小児医療および小児看護の変遷、小児看護の理念および機能と役割、3) 小児各期の子どもの生活と看護を教授した。具体的には、小児の概念や乳児期から思春期までの子どもと家族の日常生活の援助、子どもの権利擁護、小児看護の変遷、入院中の子どもの生活と看護、健やか親子 21、予防接種、感染症予防などについて学びを深めた。

また、演習においては、1) 現代社会における子どもの課題、2) 健康な子どもの成長発達、3) 小児看護におけるスーパービジョン、4) 障害のある子どもの看護を、実際に身近にいる健康な子どもや、重症心身障害や筋ジストロフィー病棟を見学し、学びを共有した。健康な子どもや障害のある子どもに実際に関わることで、既習学習と実際の子どもの統合ができるような演習を行った。学生は健康・不健康を問わず、子どもの成長発達を促す関わりや状況に応じた関わりについて五感を通して感じとることの大切さや、よりよい環境や日常生活援助が重要であることを学んでい

現代社会における子どもの課題については、小児救急や児童虐待、臓器移植などのテー

マに関して文献などを用いて情報を収集し、グループ毎に討議後プレゼンテーションを行った。全体討議を通して学生はお互いの学びを共有し、考察を深めることができたようであった。

課題としては、より深く考察する力が不足しているため、レポートに対し教員がフィードバックすることで考察する力を強化していくことがあげられる。

### 3) 成育看護実践論Ⅱ (小児の健康障害と看護実践)

2年次通年

小村三千代、村川陽子、鶴巻香奈子

成育看護実践論Ⅱは、子どもと家族を理解し、子どもの成長発達および健康レベルに応じた看護実践に必要な基礎的知識を身につけ、成長発達の促進に向けて子どもと家族への援助方法を学ぶことを目的としている。

講義内容は、子どもと家族への看護および急性期から終末期までの経過別看護、また障害をもつ子どもと家族の看護など事例を用いて教授した。具体的には、子どもの病態の理解から検査、治療処置、看護を展開し、毎回の講義の最後に看護師国家試験問題を提示した。

演習においては、小児看護に特有なバイタルサインズ測定および身体計測、静脈内点滴時のシーネ固定などを、バイタルサイン人形や新生児モデル人形などを用いて実施した。バイタルサインズ測定では、子どもの発達段階によって必要とされるディストラクションやプリパレーション、測定の順番や方法、標準値の違いなどを学ぶことができた。

また、看護の展開においては、ネフローゼ症候群、川崎病、気管支喘息の子どもと家族の看護に取り組んだ。グループワーク後プレゼンテーションを行って学びを共有し、学習内容として十分導き出されたグループの資料を学生全員に配布し、実習時の参考にするよう促した。

### 4) 成育看護学実習Ⅱ (小児看護学実習)

2年次後期から3年次通年

小村三千代、村川陽子、鶴巻香奈子

成育看護学実習Ⅱは、子どもの特徴、成長発達、家族のつながりに対する理解を深め、子どもの健康や成長発達を促進し、健康障害をもつ子どもと家族に対する看護実践能力を身につけることを目的としている。

そのため実習目標は、1) 子どもの成長発達が理解できる、2) 子どもと家族のおかれている状況が理解できる、3) 子どもの健康障害に応じた援助ができる、4) 子どもの安全・安楽に配慮した援助ができる、5) 保健医療チームの役割が理解できる、とした。

実習は小児病棟、NICU、小児科外来で実施した。小児病棟においては、入院している 1

名の子どもを受け持ち、子どもと家族がおかれている状況を理解し、安全・安楽に配慮した具体的な援助方法を学ぶことができた。NICUにおいては特に感染予防対策やデベロップメンタルケアについて理解を深めた。

小児科外来においては、診察を受ける子どもと家族の看護や検査・処置時の具体的なディストラクションやプリパレーション、成長発達に応じた子どもへの声かけやねぎらいなどを学んだ。また、乳幼児健診や予防接種では、子どもの反射や栄養指導、離乳食指導やアレルギーに関する母親の不安などを聞き、身体計測や診察の場面を見学することで学生の学びが深まっていた。

## 【母性看護学領域】

### 教育方針

基礎看護学では、専門職としての看護と看護学とは何かを中核に据えて、看護学についての概括的な知識と考え方を理解させるとともに、看護の役割の重要性を認識できるように教授する。併せて、看護実践に必要な諸理論を学ぶことを通じて、自らの看護に対する姿勢を考えさせる機会としている。具体的な科目は、看護学概論、看護倫理、看護教育、フィジカルアセスメント、臨床判断論、基礎看護技術、基礎看護学実習等である。これらの科目が有機的に統合された状態で学生に定着することを目指し、臨床看護学の基礎的理解と展望を導くことをねらいとしている。

成育看護論Ⅰ（母性看護学）では、女性のライフサイクル（乳幼児期・思春期・成熟期・更年期・老年期）およびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は成育看護論Ⅰ（母性看護学概論）、成育看護実践論Ⅰ（母性看護学各論）、成育看護学実習（母性看護学実習）で構成している。特に母性看護学実習は妊娠期・分娩期・産褥・育児期に重点を置いて実習を展開する。

### 科目の教育活動

#### 専門分野

#### A 基礎看護学

##### 1) 看護学概論

##### 1年次前期

宮崎文子

看護学の導入として、看護とは何かを多角的に学び、看護を取り巻く主要概念（環境・人間・看護・健康）、看護の歴史的変遷、看護の対象としての個人および家族を理解し、併せて、看護理論（モデル）の意義を学び看護における理論活用のあり方が理解できるよう、自らの看護に対する興味・関心が持てるような教材の工夫に配慮した。

講義内容は、看護の概念、看護を考える4つの柱（人間・環境・看護・健康の関連）ナイチンゲールの哲学、看護モデル（ヘンダーソン・オレム・ロイ・ペプロウ）、看護の歴史と看護学の確立、看護教育制度、看護と法律、保健医療システムと看護、看護の機能と業務、看護活動、病院看護管理等である。開学2年目の学生であり昨年度の反省を踏まえ講義資料の充実を図った。出席状況は90%以上であり大変興味を持って講義に臨んでいた。今年度もノートを取る学生が少ないように見受けられた。今後は積極的な学生参加が可能となるようにさらなる講義法の検討が課題である。

## 科目の教育活動

### D 医療臨床実践看護学Ⅱ

#### 1) 成育看護論Ⅰ

##### 1年次 後期

宮崎文子、渡邊淳子、小嶋奈都子、南野知恵子

成育看護論Ⅰ（母性看護学概論）の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖（種族保存）の側面から、女性の全生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への対応に視点を置き、母性各期における援助方法および母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとした。講義内容は、母性の概念、リプロダクティブヘルス/ライツの概念、セクシュアリティ（性の概念）、社会の変遷と母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計から見た動向、母性看護の対象となる人の理解、女性のライフサイクル各期の健康問題と看護、母子保健に関する関係法規、母性看護における倫理的課題（生命倫理）と対処法について教授した。本年度はわかりやすい講義資料作成に努め授業展開を行った。講義終了後全体の授業評価等を行った。出席状況は良好であったができるだけ学生参加型の授業内容となるよう、来年度に向けて講義内容の精選に努めたい。

#### 2) 成育看護実践論Ⅰ

##### 2年次 通年

渡邊淳子、小嶋奈都子、早坂奈美

人間の性と生殖の意義、母性の特性について理解したうえで、子どもを生み育てる成育にかかわる妊娠・分娩・産褥（子育て期）の周産期における看護の実際について理解できることをねらいとした。妊娠・分娩・産褥・新生児期の各期における母体および新生児の生理学的変化を学修し、女性と子ども、そして家族にも視点をあて、起こりうる状況とそれに伴う反応を理解できるよう事例を踏まえて講義・演習を実施した。妊婦体験ジャケットを用いた体験学習を取り入れ、さらに妊婦健康診査、妊婦体操、新生児健康診査、沐浴演習等を実施した。看護過程では、より健康な状態をめざしたケアのあり方を考えられる



よう、グループワークを取り入れ、指導の実際について検討するなど学習方法を工夫した。来年度に向けては、学生自身が主体的に学習できるよう講義・演習の方法を検討していきたい。

### 【精神看護学領域】

#### 教育方針

精神・身体・知的の三障害の概念や特性を理解できるように、歴史的背景や障害に関する基礎的な知識、実際に行われている看護援助を示しながら、障害に対する理解を深められるようなカリキュラムを実施している。また、授業や実習を通して、自らの障害者観と向き合いながら、障害者の健康増進を考えられる力を身につけ、ノーマライゼーションの推進を支援できるようになることを目指している。そして、知識として習得することだけに留まるのではなく、障害者を取り巻く現状や課題について、自らの意見を持ち、積極的に行動できるような態度を身につけてほしいと願っている。

#### 科目の教育活動

##### 専門分野

#### D 医療臨床実践看護学Ⅱ

##### 1) 障害者保健論

###### 1 年次後期

田中留伊、伊藤桂子、中村裕美

初学者であるため、できる限り難しい専門用語を用いず、障害について関心が持てるように心がけた。また、障害の概念や心の健康、障害者の歴史的背景が理解できるように、教科書やオリジナルのスライドを用いながら授業を行い、将来看護師として、障害や障害者とどのように向き合っていくのか考えられるような課題を与えた。さらに、実際に地域で生活している薬物依存症者の方をゲストスピーカーとしてお招きし、障害を抱えながら地域で生活することを考える機会とした。一方的な授業にならないように、授業内で学生が発言できる機会を設けたり、リアクションペーパーを書かせるなどの配慮を行った。次年度はカリキュラム改正に伴い開講しない予定である。

##### 2) 障害看護実践論

###### 2 年次前期

伊藤桂子、田中留伊、中村裕美、松沼瑠美子

精神・身体・知的の三障害を持つ対象を理解できるように、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。障害とともに生きることで社会生活への参加が制限

されたり、生活行動の変更を余儀なくされる対象に対する理解を深めるために視聴覚教材を用いて学び、看護の特徴を考えられるように授業を行った。筋ジストロフィー、重症心身障害などの対象の具体的な看護実践の方法や生活の質を高める看護実践の方法については、臨床で看護を実践している講師を招き、生きた看護体験を学べるよう授業を行った。各授業の最後にリアクションペーパーを提出させ、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足、フィードバックできるような工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は好評であったため、次年度も継続していく予定である。

### 3) 精神看護実践論

#### 2 年次前期

田中留伊、伊藤桂子、中村裕美

精神的な健康に障害を持つ対象を理解できるように、主な精神疾患や特徴的な症状について、オリジナルのパワーポイントや教科書を用いて授業を展開した。また、精神科医療の現状を踏まえ、入院治療だけではなく地域社会生活への適応に向けての看護実践方法を考えられるように視聴覚教材を用いて授業を行った。さらに、精神障害のある対象の支援に必要な基本的な看護技術が学べるように看護過程を展開させ、グループワークを行う事で学びを深めた。各授業の最後にリアクションペーパーを提出させ、次回の授業で学生の理解しにくい点を補足、フィードバックできるような工夫を行った。リアクションペーパーや前回の授業の復習は「解らないことが質問しやすい」「知識の確認になる」など好評であったため、次年度も継続していく予定である。

#### 【地域・在宅看護学領域】

##### 教育方針

地域・在宅看護学領域では、地域で生活するあらゆる発達段階や健康レベルに応じた個人・家族、小集団・地区を対象とした健康の増進、健康・生活上の課題を解決するための理論と方法および地域看護の役割を理解できることをねらいとする。

地域特性を踏まえ、行政保健、学校保健、産業看護、在宅ケアの場において、そこで生活・活動する人々が自らの健康状態を認識し、制度や社会資源を活用しながら疾病予防、健康の保持・増進を図るための支援方法、潜在的・顕在的な地域のニーズを把握するための地区診断の理論と方法、住民・専門職・関係者が協働で取り組む健康増進計画等の立案・実践・評価、地域ケアシステム、施策化等について学習する。

具体的科目は、地域看護概論、地域看護管理論、地域看護活動展開論、地域診断論、在宅看護論、在宅看護実践論、在宅療養支援実習、地域看護活動展開論実習、地域看護管理論実習等で構成している。

## 科目の教育活動

### A 基礎看護学

#### 1) インタープロフェッショナルワーク演習

##### 2年次後期

佐藤潤、清水洋子

これからの医療におけるチーム医療の推進の必要性を理解し、患者を中心として多職種が協働して患者の治療にあたる具体的な実践方法を学ぶことを目的に講義を行った。講義では、医師、薬剤師、管理栄養士、作業療法士、理学療法士といった専門職の方々の実際の講義を通して、各職種の役割、各職種が看護師に対して求めていることを中心に学習した。これらの各専門職による一連の講義終了後は、事例を用いたグループワークを通して、どのように多職種間の連携を実践していくのかについての学びを深めた。来年度は、グループワークの方法、内容を再検討し、学生が他職種の協働についてより理解が深められるような工夫をしていきたいと考えている。

### D 医療臨床実践看護学Ⅱ

#### 1) 在宅看護論

##### 2年次後期

松沼瑠美子、清水洋子、和田洋子

地域看護における在宅ケアおよび在宅看護の位置づけを理解し、在宅療養者・家族支援のための在宅ケアシステムと看護職および関係職種の役割と協働、支援の特徴、対象のニーズ、在宅ケアを取り巻く現状と課題について学ぶことを目的に講義を行った。施設内とは異なる生活の場での療養生活をイメージし、在宅ケアシステム、多職種間の連携・協働を視野に入れた看護過程の展開、在宅での看護師の役割・機能が理解できるよう、ビデオ、スライド等の映像や事例を用いた講義を中心とした。また、外部講師として、高齢者複合施設および訪問看護ステーションの統括部長を招き、対象の様々なニーズに対応するために工夫されたサービス形態や内容、看護師に期待される役割・機能について学びを深めた。次年度は、2年次生というレジネスを考慮し、在宅ケアを取り巻く現状や課題がもっと理解しやすい教授方法・内容を工夫したいと考えている。

#### 2) 在宅看護実践論

松沼瑠美子、清水洋子、佐藤潤、高地たか子

安心安全な在宅ケアの継続と生活の質的向上を目指し、在宅療養環境と療養者・家族のニーズに応じた具体的な看護実践の方法を学ぶことを目的に講義・演習を行った。グルー

プワークにより、事例について理解を深め、ケアプランを作成し、訪問看護場面を想定、ロールプレイを行うことで、訪問場面における看護のポイントについて具体的に学習した。また、同事例について、日常生活支援、生活拡大への支援の方法について、演習を行い個別的な方法や工夫について学んだ。医療依存度の高い療養者・家族の支援については、在宅人工呼吸器、アンビューバッグ、足踏み式吸引器、在宅酸素療法、在宅腹膜透析、在宅高カロリー輸液、PEG、体圧測定、褥瘡予防マット等、実際に機械器具の操作や体験を通して学習した。次年度は内容の厳選をし、より看護の視点が深められるような方法を工夫したいと考える。

### 3-3 科目の教育活動（研究科）

#### 1) クリティカルNP特論

##### 1年次前期

草間朋子、石川倫子、クローズ幸子、塚本容子、西田博

先進国におけるNPの現状から日本におけるNPの課題を考える。またクリティカル領域のNPの業務・実践内容を理解し、NPとしての役割を認識できるように授業を構成した。

米国でNPとして活躍されているクローズ幸子先生、塚本容子先生の実践的な授業内容は学生の「NPの活動」の理解につながった。また各自がNPに関する課題を追究し、それを発表することで、さらにNPの役割、活動に対する理解が深まった。学生からもNPとしての活動がイメージできたなど好評であった。

今後の課題として、臨床経験5年以上の看護経験を活かし、クリティカル領域の患者に対するNPの視点から看護の理解を深め、自己の課題を見出し、今後の診療看護師・特定看護師としての実践活動につなげられるよう授業内容を追加していく。

#### 2) 人体構造機能論

##### 1年次前期

今井秀樹、伴信彦、山下修二、小宇田智子

人体の調整統合機能の変化を判断するための基礎的な知識を理解し、生命維持に直結した身体の構造と機能について理解すること、さらにクリティカル領域で遭遇するさまざまな障害の病態や症候を人体の構造と機能の視点から統合することを目的とした。「スネル臨床解剖学」をテキストとし、発表形式で学生主体の授業とした。時間が限られていることと、テキストが医学科学生を対象としたものであったことなどから必ずしも学生達が十分な知識を得られたとは言い難いが、統合実習においてここで得た知識が役立つことを実感し、さらなる学習の必要性を自覚するものと思われる。

次年度は担当教員に医師を加え、より臨床に即した内容を教授できるようにする。

### 3) クリティカル疾病特論

#### 1 年次前期

前島新史、布施淳、矢野尊啓、小林佳郎、安富大輔、樺山幸彦、吉川保、門松賢、島田敦、高橋正彦、大石崇、中島由槻、小山田吉孝、中村芳樹、尾藤誠司、森朋有、鈴木亮、岩田敏、松原啓太、保阪由美子、今井秀樹、伴信彦

クリティカル領域で頻度の高い疾患について、病態的な基礎知識および、特定看護師（仮称）としての実践に必要な疾病を理解させることにより、患者に起こっている症状を臨床推論し、診断を確定していく能力につながる知識を習得させた。来年度は臨床に即した事例についてさらに追加し、理解と知識の集積を深めることを目標とする。

### 4) 診察・診断学特論

#### 1 年次前期

尾藤誠司、樺山幸彦、菊野隆明、倉持茂／前島新史、大島久二、磯部義憲、伴信彦、今井秀樹

患者の状況に対応した診察・診断が行えるようにするために、診断のための検査データの解釈、画像診断についての知識を教授した。最初に概論として診察・診断の意義とプロセスを説明した後、各分野の専門家が臨床検査と画像検査の各論について講義することにより、実践的な知識の習得を図った。次年度も基本的には同じ授業構成とするが、実習現場からのフィードバックに基づき、講義内容を充実させていく。

### 5) フィジカルアセスメント学演習

#### 1 年次前期

松山友子、穴沢小百合、石川倫子、小山田吉孝、布施 淳、安富大祐、鄭 東孝、高橋正明、藤内美保

大学院生自身がこれまでの臨床経験を振り返り、学習課題を顕在化させることにより、知識・技術を深めていくことを教授・学習の基本とした。そこで、フィジカルアセスメントの重要性に関する動機付けを行い、基本技術について説明した後、器官系統別にグループ編成を行い、グループ毎の学習内容に関するプレゼンテーションと質疑応答を通して学習を進めた。これにより、その後の技術演習および症状に応じたフィジカルアセスメントの基盤形成に繋がったと考える。

技術演習では、各自が事前に各器官系統別のフィジカルアセスメントの実施内容をレポートに整理したうえで実施し、自己評価を通し自己の課題を明確にすることを課した。また演習の展開では、これまでの学習を活かして担当学生がデモンストレーションを実施し、

疑問点等を全員で検討しながら進めた。ディスカッションにより解決できない点に関しては、臨床教授（医師）に助言を得て理解を深めた。次年度は、実際にフィジカルアセスメントを一症例にどのように活用・展開するかを学習するために、事例を用いた実践的演習を加えたい。

## 6) 臨床推論

### 1年次 前期

尾藤誠司、鄭東孝、鈴木亮、安富大祐、森朋有、矢野尊啓、菊野隆明、松山友子、穴沢小百合

クリティカル領域で遭遇する症状に応じて臨床推論を行う過程を理解し、それを裏付けるためのフィジカルアセスメントを行い、症状に応じた的確な臨床推論ができるための知識・技術を身につけることを目的に授業を構成した。授業展開については、各専門医が臨床の事例を用いながら、どのように臨床推論するのかを中心に教授した。取り上げた症例は、発熱、腹痛、嘔吐・吐下血・下痢、胸痛、呼吸困難、浮腫、めまい、けいれん・麻痺、意識障害、ショック、血糖値・電解質異常、貧血、外傷等のある患者である。

これらの症状に対する臨床推論は、統合実習で学生たちが遭遇する症状とほぼ一致していた。また救急医療の現場では症状に対する臨床推論が中核であり、本授業における学習内容はまさしく実習での症例に対する臨床推論に活用され、学生の臨床推論に対する理解が深化していた。この結果を踏まえ、次年度も今年度と同様の症状に焦点を当て授業を継続する。

## 7) 診断のためのNP実践演習

### 1年次 後期

草間朋子、浅野妙子、石川倫子、磯部義憲、菊野隆明、森朋有、鄭東孝、尾藤誠司、安富大祐、鈴木亮、布施淳、高橋正明、早川隆宣、近藤久禎

クリティカル領域で経験する患者のフィジカルアセスメントができ、必須とされる検査について安全かつ確実に実践できるための知識・技術を習得できるようにすること、また経験する機会が多い特徴的な症状について、科学的根拠となるデータに基づく診察・診断の考え方、診断方法を想起しながら診断するプロセスを実践的に学ぶ。さらにクリティカル領域の事例に対して診断に伴う的確なインフォームドコンセントが行えることを目的に授業を構成した。具体的な授業は、シミュレータを用いた動脈採血の演習、東京医療センター放射線部門（CT、MRI、血管造影室、PET等）で医師、診療放射線技師が行う検査の見学と検査の必要性やCT等の読影等とした。腹部超音波検査については、今年新たに東京医療センター臨床検査部門の協力を得、超音波検査の見学を通して学生の疑問を

解決する機会を設定することで、理解を深めることができた。診断後の患者および家族への支援についてはインフォームドコンセント特論との重複内容があり、今後学習内容の精選をする必要がある。

## 8) 臨床薬理学特論

### 1 年次前期

廣田孝司、青山隆夫、布施淳、吉川保、磯部陽、松原啓太、大島信治、伴信彦、今井秀樹

安全かつ効率的な処方計画を立案するための知識習得を目標に、全体の半分を薬物動態と安全管理に関する講義に充てた。その上で、クリティカル領域で頻用される薬物について各論的な講義を展開し、各種薬物の反応機序、薬物の効果に個人差が生じる要因を理解できるよう配慮した。次年度も基本的には同じ授業構成とするが、実習現場からのフィードバックに基づき、講義内容を充実させていく。

## 9) 治療のためのNP特論

### 1 年次後期

小林佳郎、吉川保、島田敦、大石崇、加藤良一、中村芳樹、南雲正士、石志紘、矢野尊啓、尾藤誠司、小村三千代、坂本祐子

クリティカル領域における患者の健康状態を包括的に判断し、必要な治療の判断と実施ができるスキルを修得することを目的としている。そのため、クリティカル領域において特徴的な周手術期の管理や高齢者、終末期やがん化学療法を受けている患者、小児や血液に関する問題、などの内容で構成した。

講義は、専門医が臨床現場での事例を用いながら科学的根拠が明確になるよう教授した。しかし、多様な発達段階や健康段階にある患者の治療すべてにふれることは困難であった。今後は、クリティカル領域においてNPとして活動するために必要な教育内容を精選し、学習内容の統合化が図れるよう教授する。

## 10) 治療のためのNP実践演習

### 1 年次後期

草間朋子、浅野妙子、石川倫子、児玉菜桜、吉岡早戸、小井土雄一、小笠原智子、高里良男、正岡博幸、磯部陽、萬蔦憲、小山田吉孝、吉川保、菊野隆明、眞隆一、島田敦、落合博子、浦上秀次郎、加藤良一、大石 崇、安富大祐、鈴木亮、鄭東孝、高橋正明

クリティカル領域における医師の診断に基づく患者の健康回復のために必要な治療を選択し、患者の意思決定に基づいた治療方法の判断と治療プロセスを実践的に学ぶことを目

的に授業内容を構成した。また実際にシミュレータを用いてシミュレーションすることで、自己の役割・限界を明確にする授業方法を工夫した。

具体的には、シミュレータを用いて、以下の技術トレーニングを行った。

- 1) ショックの事例における治療技術（圧迫止血）
- 2) 呼吸管理の技術（気管挿管）
- 3) 外傷時の治療（縫合）
- 4) 褥瘡をもつ患者のデブリートメント
- 5) 栄養管理の技術（超音波ガイド下の穿刺に限定した中心静脈ラインの確保）

さらに、治療を受ける患者への支援の授業では、本学に入学前の治療における看護師としての支援と1年間学んだ上で考えた支援内容を明らかにし、診療看護師・特定看護師としての役割を熟考した。そして1年間の学習を統合する演習として、「クリティカルな事例が変化を起こした時の患者の状況判断とその対応が実践できる」ことを目的に、テルモメディカルプラネックスで、初療、ICUで経験する事例のシミュレーショントレーニングを行った。その結果、自己の判断能力、調整能力等の限界を自覚し、さらに協働能力を高めていく必要性を認識でき、2年次の実習につなげることができた。

#### 1 1) 統合実習

##### 2年次

草間朋子、今井秀樹、浅野妙子、小村三千代、石川倫子、田中留意、佐藤潤、児玉菜桜

クリティカル領域における患者に対する必要な包括的健康アセスメントおよび治療方法の選択を主に学んだ。さらに実践の体験をとおして診療看護師・特定看護師の役割を認識することを目的として実習を展開した。また実習終了後に学生と実習担当者全員で学びと課題の討議を通して、診療看護師・特定看護師としての役割を認識し、臨床現場での活動のイメージにつながった。

課題として、実習期間が2週間の実習においては到達目標の達成が困難であることが明らかになった。特に看護師との連携が難しいことから実習期間の見直しを図った。また評価内容、評価方法に対する意見を参考に評価表の見直しを行った。さらに看護師との連携を具現化するために看護カンファレンスへの参加、受け持ち看護師との情報共有などを実習方法の一部に加えることとした。

#### 1 2) 医療倫理特論

##### 1年次前期

宮崎文子、古都昌子、矢野尊啓

昨年から講義時間数が半分の15時間に縮減されたことで、8回の講義時間を講義を4回、



その後、事例検討を2回、グループワーク及び発表を2回に配分した。

看護専門職としての倫理の原則、意思決定のための判断基準について学び、院生の経験をふまえて分析的に思考し、倫理的感受性を高めることを目的として取り組んだ。

すすめ方は、専門職とは何か、看護倫理に関する基礎的な知識、重要な言葉を講義し、倫理的葛藤が生じるプロセス、倫理的意思決定のステップなどについて臨床で遭遇しうる倫理的問題を抽出しながら、事例検討をすすめた。グループワークではディベート法などの討議法も取り入れて価値葛藤が生じる事例における倫理的判断について意見交換し、学習を深めた。講義内容には興味を持って積極的に取り組めており、クラス内での意見交換が活発になされた。倫理の問題を掘り下げれば時間不足は歪めない。

### 1 3) コンサルテーション・インフォームドコンセント特論

#### 1 年次後期

清水洋子、古都昌子、大島久二、矢野尊啓、尾藤誠司、岩田敏

医療におけるインフォームド・コンセントの意義、クリティカル領域における患者の状況に対応したインフォームド・コンセントの技術、インフォームド・コンセントにおける高度実践看護師の役割、コンサルテーションの基本理論とインフォームド・コンセントとの関連について学習することをねらいとし、授業を展開した。具体的に、インフォームド・コンセントに実際に従事している多分野の専門家による講義と意見交換、インフォームド・コンセントの模擬演習、グループワーク、全体討議を導入しより実践に即した学習ができるよう工夫した。

講義の学習を踏まえ、院生はグループ演習・発表会において主体的に授業に参加し、各領域別の課題事例を発表し全体討議を通して自身の活動や学習上の課題を深めることにつながった。

今年度の教育評価、授業への感想意見等を踏まえ、次年度はクリティカル領域の学習を強化し、さらに学習目標が達成できるように科目構成、講義内容・方法を工夫し授業を展開することが課題である。

### 1 4) チーム医療とスキルミクス

#### 1 年次後期

清水洋子、坂本祐子、伊藤桂子、矢野尊啓、森達也、眞隆一、水野有紀、濱也智子、神谷しげみ

チーム医療、チーム医療におけるスキルミックスの理解を深め、チーム医療のあり方を探りながら、役割分担、協働のあり方を見つめ直し、これからのチーム医療を探求的に学ぶことをねらいとして授業を実施した。

講義時間は前年度の2単位から1単位に変更があったが、各医療職の役割について理解が深まるよう、なるべく多職種の講師から情報提供を頂き意見交換が図れるように講義内容を工夫した。また、自らが経験したチーム医療の現状と対比しながら思考を深められるようグループワークや全体討議を取り入れた。これにより、院生は自身の活動を振り返り、今後の新しいチーム医療のあり方、NPや特定看護師に期待される役割等について考え、課題を明確化する機会となった。

しかし、全体的に討議時間が短縮されたことも影響し、院生の気づきや学習の深まりについては個人差が目立った。また、主体的な学習で自らの経験を想起して授業に臨むという姿勢が、不十分な者もいた。授業評価や院生の意見・感想を踏まえ、学習効果の維持・向上が図れるよう授業内容、外部講師の選定等を工夫し授業展開することが課題である。

## 1 5) 医療安全特論

### 1 年次後期

草間朋子、石川倫子、加藤良一、岩田敏、鈴木義彦、大石崇、田沼明子

医療上の事故等(インシデント、アクシデント等を含む)は、日常的に起こる可能性があることを認識し、事故を防止して患者の安全の確保を最優先することを理解する。特に実践の場において、医療事故を防止するために必要な診療看護師・特定看護師としての能力は、医師の指示の正当性を思考できる力、リスクを回避するために医療行為の優先度を決定する力、患者に不利益な状況が生じている場合に患者に情報提供できる力、患者が受ける治療や処置に伴う有効性や危険性について患者が理解できるように説明できる力である。このことが実践的に培えるように病院における感染事例、IVH挿入における事故事例を用いて、授業展開をした。さらに挿管チューブの抜管をめぐる訴訟事例を用いて分析し、医療上の事故が発生した場合の医師の対処の仕方とその責任について学び、NPとしての自己の対処の仕方やその責任について考えた。

## 1 6) 政策医療特論

### 1 年次前期

松本純夫、加我君孝、野島照雄、石原傳幸、秋山一男、小村三千代、村川陽子

政策医療特論では、日本における医療や看護の歴史的経緯と現状を理解し、現代の医療および看護における課題を明確にすることや、政策医療の歴史や特徴、現代社会における位置づけ、日本の医療においてどのように展開しているか理解を深めるとともに、政策医療における看護の方法論を探求することを目的としている。

そのため、政策医療としては感覚器疾患、精神疾患、神経・筋疾患、免疫異常・アレルギー疾患において政策医療を担っている医師が教授した。また、政策医療における看護と

して学生自身が体験した看護の中で印象に残っている看護を語り合う、看護リフレクションを行った。そこでは、語られた看護に名前をつけ、その中から各グループで1つの看護を選択し、その看護現象を意味づけ、メンバー全員で看護名をつけた。これらのことは、政策医療における看護の基盤作りになったと思われる。

政策医療における看護と課題では、関心領域の内外の質の高い研究論文をクリティークし、知見や実践への適用を見出し考察することを課題として取り組んだ。学生は「災害医療看護」、「救急医療看護」、「集中医療看護」、「移植看護」、「慢性期看護」の中から1テーマを選択した。選択したテーマに関連した質の高い研究論文を用いて考察し、新たな知見を導きだし、政策医療における看護と課題について考察する機会となった。

## 17) 保健医療福祉システム特論

### 1 年次後期

草間朋子、金子あけみ、佐藤潤

少子高齢化が急速に進展する中、保健医療分野においては知識・技術の高度化と専門分化が進んでいる。福祉分野においても福祉ニーズの増大、多様化が顕著であり、このような社会の要請に応え得る高度な専門性が求められている。

さらに、社会保障と税の一体改革に代表されるように保健医療福祉政策を巡るさまざまな議論が活発になされている。このため、本講では、まず、保健医療福祉に係る主な制度及び政策決定プロセス等に関する知識、健康政策の意義と課題について学ぶこととした。

また、少グループでの演習において、履修生には関心のあるテーマを自ら選び、現行制度上の問題点や課題等について、多角的に調査し、プレゼンテーションを行う共有学習とした。この調査発表の機会を通して、看護現場だけでなく、広く社会に目を向け、保健医療福祉政策への関心や理解を深めるとともに、効果的なプレゼンテーションや討論の方法についても学べる機会とした。

上記のような講義と演習の組み合わせによる学習効果があったことから、来年度においても継続し、充実した内容となるよう努めたいと考えている。

## 18) 看護教育特論

### 1 年次後期

宮崎文子、石川倫子

診療看護師・特定看護師としての役割を果たすために、必要な教育原理と教育方法を学び、専門職者としての自己教育力、生涯教育力を具えた人材育成を学ぶことを目的に授業を構成した。具体的には1) 看護教育における教育的機能、2) 看護教育の歴史的変遷と看護教育制度、3) 今後の看護教育の課題、4) 成人及び専門職における「教育・

学習」の考え方等を講義後、各自が今後行うであろう授業の指導案・指導計画を作成し、授業を実際に行った。実施したからこそ、自らが抱える教育課題の解決の糸口を見つけることができた。今後は学生たちの授業対象者が臨床看護師のため、専門職者における教育のあり方を中心に講義展開するとさらに効果的な指導案・指導計画の作成できると考える。

## 19) 看護管理特論

### 1年次 後期

矢崎義雄、山西文子、大鶴知之、浅野妙子

学生自身が、現在まで積み重ねた看護管理に関する知識と経験を基盤として、学問としての組織論、看護管理論、病院経営論、社会福祉システム論に関して、なるべく具体的に説明し、興味と関心を引き出せるよう心がけた。保健医療福祉の分野では、制度、政策の観点についても触れ、広く社会に通用する知識や概念を獲得できるよう、最新の公的機関の報告書、審議会、あり方検討会等の情報を提供し、学生が自ら興味をもって検索できるよう方向づけた。組織論では、個人・チーム・看護部・病院という構造的な変化と、組織そのもののライフサイクル、機能について説明し、目標管理を含めてさらに新しい管理的な視点についても提案した。また、経済的、効率的な組織運営に関する経営的な視点についても考えを深められるよう意図した。

さらに今までの学生自身の経験にフィードバックしながら今後の活動に役立てるように、新治療システム導入時の医療チーム活動活性化に向けた自身の戦略、および組織・勤務管理に関するワークを取り入れた。

次年度は、管理に関する最新の情報、資料を学生自身が判読し、自らの考えや意見をもてるよう働きかけたい。

## 20) 研究の進め方

### 1年次前期

草間朋子、宮崎文子、今井秀樹、石川倫子、佐藤潤、小宇田智子

研究に関しては初心者が多いことを考慮して、看護における研究の意義と特徴、研究を進める上で必要な知識、研究計画書を立案するプロセスが理解でき、研究倫理を踏まえ研究者としての姿勢が持てること目標に、できるだけ参考事例を挙げ教授した。具体的教授内容は以下の通りである。看護研究の意義と研究の進め方、調査研究の基礎、研究デザインとリサーチクエッションの立て方、研究倫理、質的研究、量的研究、文献的研究、医療統計の基礎、研究論文の書き方、研究発表の進め方等である。今後は研究指導を進める上での個人にあった指導方法の工夫が課題である。

## 2 1) 原著論文講読

### 1 年次通年

伴信彦、今井秀樹、田中留伊、佐藤潤、伊藤桂子、小宇田智子、村川陽子、渡邊淳子

クリティカル領域に関係した英語論文を読んで内容を紹介し議論することを通して、医学・看護学分野の英語論文を読む力を養い、専門的な情報の収集能力を高めることを目標とした。最初の数回の授業で論文の構成と文献検索の方法について講義した後、学生による発表・討議を順次行った。論文の選択や内容について教員が相談に応じる体制をとり、授業時間外にも適宜指導を加えた。英文の読解が主となって論文の読み込みが必ずしも充分ではないケースがあったため、次年度は論文の読み進め方に関する指導を強化し、議論のポイントが明確になるよう心がける。

## 2 2) 課題研究

### 1 年次、2 年次通年

伴信彦、今井秀樹、田中留伊 その他全教員

臨床現場で遭遇した疑問あるいは問題を科学的に解決する能力を養うために、前期より開講している。具体的には、数回の授業を行った後、学生自らが希望する教員グループより指導を受け、実際に科学的な根拠に基づく知識がどのようなプロセスで獲得されるか学習している。1 年次生は課題研究のテーマと内容について集中的な指導を行い、研究計画書の発表を行った。また、2 年次生については 2 年間取り組んだ研究の成果を発表会で発表するとともに、論文としてまとめて提出した。

【課題研究一覧】

- 救急外来における家族の立場から見た対面の有効性とその条件  
指導教員名 宮崎文子教授、伊藤桂子講師、早坂奈美助教 石原夕子
- 気象要因と救急搬送数との関連-茨城県北部を対象地域として-  
指導教員名 今井秀樹教授、松沼瑠美子講師、牧栄理助手 岩沢有里
- 看護におけるフィジカルアセスメントの歴史的経緯と意義  
-米国の看護史からみた日本の現状と課題-  
指導教員名 伴信彦教授 荻野康崇
- walk in 患者に対応する救急外来看護師の看護実践の様相に関する研究  
指導教員名 松山友子教授、渡邊淳子講師、高野律子助手 甲斐礼圭
- 看護組織における組織文化とユーモア志向性との関連  
指導教員名 栗屋典子教授、古都昌子准教授、雛田雅代助手 加藤美奈子
- 食生活と疾患との関係について-国民健康栄養調査の結果を用いた生態学的研究-  
指導教員名 今井秀樹教授、松沼瑠美子講師、牧栄理助手 齋藤浩美
- ACHD 患者の看護においてクリティカル領域で働く看護師の持つ困難感  
指導教員名 今井秀樹教授、松沼瑠美子講師、牧栄理助手 重富杏子
- 認定看護師(感染管理)を有する特定看護師(仮称)の役割に関する研究  
指導教員名 田中留伊准教授、佐藤潤講師 島田知子
- 助産師の能力に焦点を当てた研究論文の現状と課題  
-2006年から2011年の国内論文の分析を通して-  
指導教員名 松山友子教授、渡邊淳子講師、高野律子助手 瀬戸あゆみ
- 看護師の死生観に関連する研究の動向と特徴に関する研究  
指導教員名 清水洋子教授、坂本祐子講師 多賀菜々子
- ドクターヘリフライトナースが実施可能な医行為の検討  
指導教員名 田中留伊准教授、佐藤潤講師 多田真也
- 解熱・体温変化に有効的な冷罨法に関するシステマティックレビュー  
指導教員名 田中留伊准教授、佐藤潤講師 忠雅之

呼吸のフィジカルアセスメントにおける OJT の指導状況 指導教員名 穴沢小百合准教授、村川陽子講師、中村裕美助教	冷水育
クリティカル領域における特定看護師(仮称)を目指す学生の看護師との協働に対する考え 指導教員名 石川倫子准教授、小宇田智子講師、今井真喜助手	松村美絵
ICU におけるリーダーの役割遂行を困難にしている要因 指導教員名 栗屋典子教授、古都昌子准教授、雛田雅代助手	宮下郁子
特定看護師(仮称)を目指す学生の臨床判断の実態調査 -救急外来における腹痛事例を通して- 指導教員名 宮崎文子教授、伊藤桂子講師、早坂奈美助教	村田美幸
日本で Rapid Response System を導入する上での問題点と対応 ～看護師の視点からの提言～ 指導教員名 伴信彦教授	森寛泰
一般病棟における中堅看護師の夜間急変の予兆の判断 指導教員名 石川倫子准教授、小宇田智子講師、今井真喜助手	山口壽美枝
救急初療の場における家族への支援内容に関する研究 指導教員名 清水洋子教授、坂本祐子講師	横山淳美
救急外来における看護師-医師間の協働関係を作り出す看護師の技術特性 指導教員名 石川倫子准教授、小宇田智子講師、今井真喜助手	吉田弘毅

#### 4、業績

##### 【看護基盤学領域】

##### 1. 論文等

- 1) Anzai K, Ban N, Ozawa T, Tokonami S (2012). Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant accident: facts, environmental contamination, possible biological effects, and countermeasures. *J Clin Biochem Nutr*, 50(1), 2-8.
- 2) Ban N, Takahashi F, Ono K, Hasegawa T, Yoshitake T, Katsunuma Y, Sato K, Endo A, Kai M (2011). WAZA-ARI: Computational dosimetry system for x-ray CT examinations. II. Development of web-based system. *Radiat Prot Dosimetry*, 146(1-3), 244-247.
- 3) Ban N, Takahashi F, Sato K, Endo A, Ono K, Hasegawa T, Yoshitake T, Katsunuma Y, Kai M (2011). Development of web-based CT dose calculator, WAZA-ARI. *Radiat Prot Dosimetry*, 147(1-2), 333-337.
- 4) 伴 信彦 (2011). 電離放射線の基礎知識. 産業医学ジャーナル, 34(5), 22-26.
- 5) 伴 信彦 (2011). 放射線影響を理解する. 保健の科学, 53(12), 810-814.
- 6) 伴 信彦 (2012). 放射線の影響とリスク. 労働衛生管理, 81(1), 21-31.
- 7) 伴 信彦 (2011). 放射線リスクと除染・帰還. 日本リスク研究学会誌, 21(3), 165-168.
- 8) Ojima M, Eto H, Ban N, Kai M (2011). Radiation-induced bystander effects induce radioadaptive response by low-dose radiation. *Radiat Prot Dosimetry*, 146(1-3), 276-279.
- 9) Ono K, Ban N, Ojima M, Yoshinaga S, Akahane K, Fujii K, Toyota M, Hamada F, Kouriyama C, Akiba S, Kunugita N, Shimada Y, Kai M (2011). Nationwide survey on pediatric CT among children of public health and school nurses to examine a possibility for a follow-up study on radiation effects. *Radiat Prot Dosimetry*, 146(1-3), 260-262.
- 10) Ono K, Yoshitake T, Hasegawa T, Ban N, Kai M (2011). Estimation of the number of CT procedures based on a nationwide survey in Japan. *Health Phys*, 100(5), 491-496.
- 11) Takahashi F, Sato K, Endo A, Ono K, Yoshitake T, Hasegawa T, Katsunuma Y, Ban N, Kai M (2011). WAZA-ARI: Computational dosimetry system for x-ray CT examinations. I. Radiation transport calculation for organ and tissue doses evaluation using JM phantom. *Radiat Prot Dosimetry*, 146(1-3), 241-243.
- 12) 日比野 守男. 新医療 2011年04月号 「救済」するなら公平な方法で----モラルハザードを引き起こす年金「運用3号」問題(P79)
- 13) 日比野 守男. 新医療 2011年05月号 易々と破られた「多重防護」----他分野にも通じる福島原発事故の教訓(P65)
- 14) 日比野 守男. 新医療 2011年06月号 情報開示が不十分だ----初の家族承諾による10代前半男子の脳死判定(P73)



- 15) 日比野 守男.新医療 2011年 07月号 これ不公平感を解消できるか----専業主婦年金「救済」問題(P85)
- 16) 日比野 守男.新医療 2011年 08月号 ワクチン行政の再生に生かせ----B型肝炎訴訟終結(P73)
- 17) 日比野 守男.新医療 2011年 09月号 病院任せの「親族確認」では不十分だ----再発した臓器売買事件(P79)
- 18) 日比野 守男.新医療 2011年 10月号 インドネシア人看護師誕生の秘訣は----2人同時に難関突破の「三之町病院」(P71)
- 19) 日比野 守男.新医療 2011年 11月号 露わになった治療薬と特許権の問題----第10回アジア太平洋地域国際エイズ会議(P73)
- 20) 日比野 守男.新医療 2011年 12月号 民主党はBSE政策の誤りを認めよ----「人事」介入と9「全頭検査」への固執(P83)
- 21) 日比野 守男.新医療 2012年 01月号 「正直者は馬鹿を見る」でいいのか----専業主婦の年金保険料未納問題(P61)
- 22) 日比野 守男.新医療 2012年 02月号 世界水準のワクチン行政目指せ----ポリオ不活化ワクチン導入(P65)
- 23) 日比野 守男.新医療 2012年 03月号 将来への負担の付け回しは限界だ----税と社会保障の一体改革(P75)
- 24) 日比野 守男.埼玉県国民健康保険団体連合会 2011.6(No243)「はじめに廃止ありきの姿勢を撤回せよ----だれのための後高齢者医療制度「改革」か(P2~P5)
- 25) 日比野 守男.米国医療機器・IVD工業会(AMDD)NEWSLETTER Vol.9 「医療機器の効率的な利用で医療費の抑制を」(P3)
- 26) 日比野 守男. JMS(ジャパン・メディカル・ソサエティ)2012年 02月 外国人に難関の日本の看護師国家試験 インドネシア人2人を同時合格に導く----新潟・三之町病院(P22~P25)

## 2. 学会における発表

- 1) 伴 信彦. 放射線発がんのリスクを考える, 第64回日本酸化ストレス学会学術集会, 北海道虻田郡留寿都村, 2011年7月2日~3日.
- 2) 伴 信彦, 有田 佳織, 甲斐 倫明, 豊本 隆章, 粕谷 健二, 山崎 憲二, 高木 一. 食道がん放射線治療後の心血管障害に関する実験的考察, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.
- 3) 甲斐 倫明, 小嶋 光明, 小野 孝二, 伴 信彦. 原子力安全研究推進事業一疫学・生物の量的データを基にした新しい機構モデルに関する研究, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.
- 4) 小嶋 光明, 中山 恵輔, 伴 信彦, 甲斐 倫明. 放射線の分割照射によるDNA損傷の低減,

日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.

5) 佐藤 薫, 高橋 史明, 遠藤 章, 小野 孝二, 長谷川 隆幸, 勝沼 泰, 吉武 貴康, 伴 信彦, 甲斐 倫明, CT診断からの臓器線量評価に用いる日本人女性ボクセルファントムの構築, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.

6) 高橋 史明, 佐藤 薫, 遠藤 章, 小野 孝二, 長谷川 隆幸, 勝沼 泰, 吉武 貴康, 伴 信彦, 甲斐 倫明, 日本人成人の男女ファントムを用いたマルチスキャナーCT撮影における臓器線量の数値解析, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.

7) 高橋 史明, 佐藤 薫, 遠藤 章, 小野 孝二, 長谷川 隆幸, 勝沼 泰, 吉武 貴康, 伴 信彦, 甲斐 倫明. CT診断からの臓器線量評価システム WAZA-ARI の実験的検証, 日本保健物理学会第44回研究発表会, 水戸市, 2011年10月17日~18日.

8) 谷 修祐, 小嶋 光明, 小野 孝二, 伴 信彦, 甲斐 倫明. C3H/HeN マウスの放射線誘発白血病 (AML) 発症に及ぼす造血幹細胞の動態の数値モデル解析, 日本放射線影響学会第54回大会, 神戸市, 2011年11月17日~19日.

9) 伴 信彦. 放射線リスクと除染・帰還, 日本リスク研究学会第24回年次大会, 浜松市, 2011年11月18日~20日.

10) Tomoko Koda, Hideki Imai. The effects of flavonoids on AMPA receptor trafficking to plasma membrane of hippocampal neurons, Neuroscience 2011, 2011年11月12日~16日, Washington, DC.

### 3. 研究助成および研究成果報告書

1) 黒川清, 米野琢哉, 柴垣有吾, 津村和大, 福原俊一, 平塚義宗, 柳川堯, 吉田裕明, 我妻ゆき子, 金子あけみ. 戦略研究の新規課題に関する研究, 厚生労働科学研究特別研究事業, 2011年度.

2) 小宇田智子. ルチンの記憶障害保護作用の分子機構に関する研究. 日本学術振興会科学研究費補助金. 2011年度~2012年度.

### 4. その他 (原著、総説、短報、研究報告、実践報告、資料以外の紙上発表等)

伴信彦

1) 書評「ICRP Publication 99 放射線関連がんリスクの低線量への外挿」, Isotope News, 2011年9月号 (No. 689).

書評「放射線医が語る 被ばくと発がんの真実」, 公明新聞, 2012年3月29日.

2) 福島第一発電所事故対応シンポジウムの概要. 保健物理, 46(3), 177-178, (2011).

### 5. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

伴信彦

1) 東京大学医学部附属病院放射線科セミナー講師, 低線量放射線の発がんリスク, 2011年

6月2日.

2) 三田労働基準監督署・三田労働基準協会平成23年度全国安全週間説明会特別講演講師, 放射線と放射線影響に関する基礎知識, 2011年6月7日.

3) NV研究所「放射能・放射線を学ぶ」市民講座講師, 放射線の人体影響, 2011年7月18日.

4) 大分赤十字病院放射線診療従事者教育講師, 放射線被ばくのリスク, 2011年7月22日.

5) 環境科学技術研究所セミナー講師, 放射線のリスクと安全基準, 2011年9月16日.

6) 平成23年度島根県原子力講演会講師, 知っておきたい"カラダと放射線"のはなし, 2011年10月7日~8日.

7) 全国労働衛生団体連合会運営研究協議会講演講師, 放射線の影響とリスク, 2011年11月2日.

8) リテラジャパン「場の議論」講師, 放射線発がんの現象論と機構論, 2011年12月1日.

9) 放射線影響協会2011年放射線疫学調査講演会「放射線の健康影響について—低線量、年齢効果、甲状腺リスクの観点から」総合討論話題提供, 低線量影響の不確実性と変動要因, 2011年12月14日.

10) 東京大学医学部附属病院放射線科セミナー講師, 低線量放射線リスクの捉え方—ICRPはどこまで信用できるか, 2012年2月23日.

11) 岩手県予防医学協会平成23年度保健活動検討会特別講演講師, 放射線の影響とリスク, 2012年2月29日.

12) 岩手健康保持増進等協議会講演会講師, 放射線の影響とリスク, 2012年3月1日.

13) 第5回SRB勉強会話題提供, 幹細胞とターンオーバー研究の意義, 2012年3月5日.

14) 日本保健物理学会 理事、暮らしの放射線Q&A活動委員会 委員長、企画委員会 副委員長、国際対応委員会 委員、学会賞選考委員会 委員

15) 原子放射線の影響に関する国連科学委員会 (UNSCEAR) 日本代表団 アドバイザー

16) 内閣府 原子力安全委員会 専門委員 (原子力施設等防災専門部会被ばく医療分科会)

17) 厚生労働省 疾病・障害認定審査会原子爆弾被爆者医療分科会 臨時委員

18) 厚生労働省 電離放射線障害の業務上外に関する検討会 委員

19) 島根県 原子力安全顧問

20) 飯舘村 いたて復興計画村民会議 健康・リスクコミュニケーション検討部会 アドバイザー

21) 放射線医学総合研究所 国連科学委員会国内対応委員会 委員

22) 環境科学技術研究所 DNA修復関連遺伝子への低線量率放射線影響実験調査委員会 委員

- 23) 日本原子力技術協会 放射線防護検討委員会 委員
- 24) 日本原子力技術協会 低中線量非がん影響検討会 委員
- 25) 長崎大学医学部非常勤講師

日比野守男

- 1) 2007年11月～現在 厚生労働省「ハンセン病資料館等運営企画検討会」委員
- 2) 2010年10月～現在 国民年金基金連合会「個人型年金規約策定委員会」委員
- 3) 2011年07月～現在 日本看護協会「東日本大震災災害支援金配分検討委員会」委員
- 4) 2012年01月28日 三省堂暮らしカフェ「江戸庶民から学ぶ食の知恵」コーディネーター・司会

今井秀樹

- 1) 長崎大学医学部非常勤講師
- 2) 環境省化学物質の内分泌かく乱作用に関連する報告の信頼性評価作業班班員

金子あけみ

- 1) 金子あけみ, 厚生労働省 戦略研究企画・調査専門検討会委員 モニタリング委員
- 2) 金子あけみ, 青森県立保健大学非常勤講師 (保健福祉政策学特論)
- 3) 金子あけみ, 家族システムケア研究会 Journal of Family Systems Care 編集委員

小宇田智子

- 1) 厚生労働省の有害性評価原案作成グループ委員

#### 【基礎看護学領域】

##### 1. 論文等

- 1) 高橋智子、田代公美、松山友子(2011), 一時的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討—ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して— 報告1: ストーマの捉え方に関する経験について, 第41回日本看護学会論文集, 成人看護 I 2010,198-201.
- 2) 高橋智子・田代公美・松山友子(2011), 一時的ストーマを造設した患者の経験と看護の検討—ストーマ閉鎖後の患者へのインタビューを通して— 報告2: 生活に関する経験について, 第41回日本看護学会論文集, 成人看護 I 2010,157-160.

##### 2. 学会における発表

- 1) 浦川由紀子、田中且子、穴沢小百合(2011), 新人看護師研修「多重課題」—研修計画立案者の心理的变化—, 第65回国立病院総合医学会, 2011年10月8日, 岡山市.
- 2) 田中且子、浦川由紀子、穴沢小百合(2011), 新人看護師研修「多重課題」を実施して—新

人看護師の学びを今後の臨床指導に活かすために、第 65 回国立病院総合医学会, 2011 年 10 月 8 日, 岡山市.

3) 西田朋子、佐々木幾美、朝倉京子、福田美和子、松山友子、本田多美枝、唐沢由美子、石塚敏子、小手川良江、濱田悦子 (2011), 看護師のリフレクションに関わるしこのプロセスの特徴—継続的なインタビューを通して—, 第 31 回日本看護科学学会学術集会, 2011 年 12 月 3 日, 高知市.

4) 小手川良江、本田多美枝、唐沢由美子、石塚敏子、佐々木幾美、朝倉京子、福田美和子、松山友子、西田朋子、濱田悦子, ベテランナースの反省的実践の特徴 (第 1 報), 第 31 回日本看護科学学会学術集会, 2011 年 12 月 3 日, 高知市.

### 3. 研究助成および研究成果報告書

1) 松山友子、穴沢小百合、吉満祥子、高野律子、竹前良美、土田由美. 「点滴静脈注射滴下可能モデル教材」の教育効果に関する研究. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C). 2011 年~2013 年度

2) 本田多美枝、濱田悦子、佐々木幾美、唐澤由美子、福田美和子、松山友子、石塚敏子. 看護における反省的モデルの構築. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B). 2010 年度~2012 年度.

3) 佐々木幾美、濱田悦子、本田多美枝、唐澤由美子、福田美和子、松山友子、朝倉京子. 看護者のリフレクション能力を開発するためのプログラム構築に関する基礎的研究. 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B). 2010 年度~2012 年度.

### 4. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

穴沢小百合

1) 国際医療福祉大学: 国際看護活動論, 非常勤講師 (委嘱期間 2011.9.20~2012.3.31)

2) 国立国際医療研究センター国府台病院: 研究指導 (2011 年 4 月~2012 年 3 月)

3) 国立病院機構附属看護学校教員研究会: 講師 (研究指導) (2012.1 月~3 月)

4) 国立国際医療研究センター国府台病院: 新人看護師教育担当者研修 講師 (2012.3.21)

松山友子

1) 独立行政法人国立病院機構 東京医療センター 看護部研修会. 「看護過程専門コース」講師  
2011 年 9 月 7 日

### 【成人・老年看護学領域】

#### 1. 学会における発表

1) 小野美喜, 石川倫子, 塚本容子, 荒井孝子, 塩月成則, 光根美保, 大学院修士課程を修了した特定看護師(仮称)の活動の現状, 第 31 回日本看護科学学会学術集会, 2011 年 12

月 2-3 日, 高松.

2) 長尾莉依, 新井美希, 坂本祐子, アロマテラピーを用いた睡眠援助 高齢者のせん妄の予防のために, 第 42 回日本看護学会老年看護, 2011 年 7 月 26 日~27 日, 大宮市.

3) 中村澄江, 高平麻紀, 坂本祐子, 模擬体験による術後頸椎安静のイメージ形成 せん妄予防のために, 第 42 回日本看護学会成人看護 I・II(合同), 2011 年 9 月 17 日~18 日, 大阪市 .

4) 古都昌子, 初年度教育を受ける看護学生の「子どもから大人への移行」の意識, 第 22 回日本医学看護学教育学会学術学会, 2012 年 3 月 24 日~25 日, 鳥取.

5) 古都昌子, 雛田雅代, 看護基礎教育において初年度教育を受ける学生の「職業への社会化」への意識ービデオ教材を用いたアンケート結果よりー第 42 回日本看護学会 看護教育, 2011 年 10 月 5 日~6 日, 愛媛.

6) 古都昌子, コミュニケーションの傾向と学びたい内容についての看護学生の意識, 第 22 回日本医学看護学教育学会学術学会, 2012 年 3 月 24 日~25 日, 鳥取.

7) 古都昌子, 初年度教育を受ける看護学生の「子どもから大人への移行」の意識, 第 22 回日本医学看護学教育学会学術学会, 2012 年 3 月 24 日~25 日, 鳥取.

## 2. 社会貢献

浅野 妙子

1) 講演 東京医療保健大学における NP 教育 平成 24 年 1 月 23 日 独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター

石川倫子

1) 自己学習力向上に活かす評価, 平成 23 年度千葉県看護学校協議会研修会, 千葉市, 2011.8

2) 特定看護師(仮称)の今後の方向性, 平成 23 年度石川県看護教員協議会研修会, 金沢市, 2011.8

3) NP-クリティカル領域の教育, 全国自治体病院看護管理者研修会, 名古屋市, 2011.11

4) クリティカル領域における特定看護師(仮称)の養成教育, 国立病院機構災害医療センター研修会, 立川市, 2012.3

5) 静岡県看護教員養成講習会講師

6) 東京都看護教員養成研修課程講師

7) 石川県看護教員養成講習会講師

8) 国立病院機構横浜医療センター研究指導

古都昌子

1) 東京女子医科大学看護学会第 7 回学術集会実行委員, 2011 年 10 月

## 【小児看護学領域】

### 1. 著書

1) 小村三千代(2011).子どもの入院 成育医療 トレンデレンブルグ歩行.見藤隆子・小玉香津子・菱沼典子総編集.看護学事典 第2版.330 529 721-722.日本看護協会出版会, 東京.

### 2. 論文等

1) 小村三千代(2011).沈黙の底に潜む看護師と患者の相互作用 筋ジストロフィー病棟におけるエスノグラフィー.日本看護科学学会誌,31(3),3-11.

2) 水野照美・橋本佳美・宮碕期紀枝・吉岡恵・清水千恵・小村三千代(2011).平成21年度 臨床実習指導者研修会の実践報告 前年度の修了者との協働.佐久大学看護研究雑誌,3(1),27-36.

3) 鶴巻香奈子 呼吸器症状に対し酸素投与を行う短期入院中の幼児への看護師のかかわり. 2010年度 日本赤十字看護大学大学院修士論文.

4) 太田有美・川名るり・鶴巻香奈子・平山恵子・朝倉美奈子・江本リナ・草柳浩子・筒井真優美・松本沙織・山内朋子 (2011). 子どもと大人の混合病棟にいる看護師の遊びに対する意識とケアの変化をおこすアクションリサーチ. 日本小児看護学会誌, 20 (1), 78 - 85.

### 3. 学会における発表

1) 小村三千代.訪問レスパイトの効果と課題 医療的ケアを必要としている子どもを介護している母親の変化,第52回日本社会医学会総会講演集,2011年7月24日,富山.

2) 倉持由美・武井紀子・小村三千代.筋ジストロフィー病棟で働く看護師の葛藤と導き出された看護 看護師の語りから,第65回国立病院総合医学会,2011年10月7日,岡山.

3) 鶴巻香奈子,呼吸器症状に対し酸素投与を行う短期入院中の幼児へかかわる看護師の技,小児看護学会,2011年7月23日,埼玉.

### 4. 社会貢献(学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

小村三千代

1) テーマ「看護を語り、語りの輪を広げよう」. 独立行政法人 国立病院機構 さいがた病院看護部研修会 講師. 2011年7月22日(新潟).

2) テーマ「周産期からできる虐待予防」.第42回(平成23年度)日本看護学会学術集会 母性看護・小児看護 シンポジウム 座長.2011年8月5日(東京).

3) 基調講演「これからの筋ジストロフィー看護 1ミリの世界における看護の技」.平成23年度指定研究「筋ジストロフィー専門病院に勤務する看護師に対する院内教育プログラムの標準化」シンポジウム ー筋ジストロフィー看護を語る.2012年2月29日(東京).

- 4) 日本赤十字看護学会査読委員
- 5) 独立行政法人 国立病院機構 東埼玉病院「看護を語る会」スーパーバイザー
- 6) 独立行政法人 国立病院機構 東埼玉病院 看護研究指導
- 7) 社団法人日本筋ジストロフィー協会 在宅訪問調査員

#### 【母性看護学領域】

##### 1. 著書

- 1) 助産師資格試験研究会（斉藤益子、宮崎文子他 24 名）編（2010）：助産師国家試験予想問題 2012（第 3 版）、助産師資格試験研究会、クオリティケア東京都。
- 2) 宮崎文子（2010）.新版助産師業務要覧増補版（第 3 版）.175-200.日本看護協会出版会, 東京.

##### 2. 論文等

- 1) 関屋伸子, 宮崎文子 (2012). 健康な妊婦の入浴における身体の洗いにくさとその要因の検討. 日本母子看護学会誌, 5 (2), 29-35.
- 2) 福田晴美, 宮崎文子, 梅野貴恵 (2012).産科診療所における母乳育児推進にむけてのあり方の検討 -BFH との比較から-. 日本母子看護学会誌, 5 (2), 37-45.
- 3) 渡邊淳子 (2012). 助産ケアの実践知につながる経験に関する文献検討. 日本母子看護学会誌, 5 (2), 75-82.

##### 3. 学会発表

- 1) 渡邊淳子, 梶原順子, 菱谷純子, 古村ゆかり, 倉田貴子. 看護教員が臨地実習において感じた困難の要因と対処, 第 31 回日本看護科学学会学術集会, 2011 年 12 月 2 日 3 日, 高知市.

##### 4. 研究助成および研究成果報告書

- 1) 中林正雄, 大浦訓章, 中山摂子, 野平知良, 谷垣伸治, 神保正利, 増田美香子, 宮坂尚幸, 齋藤益子, 石川紀子, 小松佐紀, 山崎圭子, 米山万里枝, 茅島江子, 渡邊淳子, 森谷美智子, 砥石和子, 相沢澄子. 妊産婦死亡および重症管理妊産婦調査の解析からみた予防対策. 厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 分担報告書. 2011 年度.

##### 5. 社会貢献 (学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

宮崎文子

- 1) 日本母子看護学会理事
- 2) 日本助産学会代議員



- 3) 日本看護科学学会学術集会査読委員
- 4) 日本助産学会学術集会査読委員
- 5) 大分県立看護科学大学非常勤講師 (大学院)
- 6) 大分県立看護科学大学特任教授 (学部)

渡邊淳子

- 1) 日本母子看護学会監事
- 2) 東京母性衛生学会監事
- 3) 東京母性衛生学会学会誌査読委員
- 4) 京母性衛生学会チーム医療推進助産師研修委員会委員
- 5) 一般社団法人日本看護研究学会学会誌査読委員
- 6) 厚生労働省関東甲信越厚生局実習指導者講習会講師

#### 【精神看護学領域】

##### 1. 著書

1) 田中留伊(2011).薬物犯罪と看護.松下 年子,日下 修一編著.アディクション看護学.290-291,メジカルフレンド社, 東京.

##### 2. 論文等

- 1) 板山稔, 田中留伊(2011). 医療観察法病棟に勤務する看護師の自律性、ストレス、バーンアウトに関する研究. 弘前医療福祉大学紀要, 2(1), 29-38.
- 2) 伊藤桂子. (2011). DV・性犯罪加害者に対する犯罪防止プログラムの実践と今後の課題. 地域連携精神看護学研究会誌 第3巻, 54-60.

##### 3. 学会発表

- 1) 今井義和, 田中留伊, 石崎有希, 中澤伸枝, 山田尚美, 川上宏樹, 菅原裕美, 茂手木彩, 山本欣司, 医療観察法における服薬自己管理パス導入の試みと実践の評価, 第65回国立病院総合医学会,2010年10月8日,岡山.
- 2) 板山稔, 高田絵理子, 田中留伊, 青森県民のうつ病と統合失調症に対する社会的態度に関する研究,日本精神保健看護学会第21回学術集会,2011年6月18日19日,名古屋.
- 3) 板山稔, 高田絵理子, 田中留伊, 青森県民の「こころのバリアフリー宣言」の認識に関する研究,第37回日本看護研究学会学術集会,2011年8月8日,横浜.
- 4) 板山稔, 田中留伊, 青森県民のこころのバリアフリー宣言の認識と精神障害者に対する社会的態度の関連,第70回日本公衆衛生学会総会,2011年10月20日,秋田.
- 5) 伊藤桂子, カウンセリングの治療的意味に関する研究—統合失調症患者のカウンセリングにおける認知修正の側面からの分析,第1回精神看護におけるディスコース分析研究

会,2012年3月18日,東京.

6) 河井明美, 須藤淳, 若林幸久, 東海林勝, 久保田圭子, 松岡静子, 細谷和夫, 磯村清美, 笠原智樹, 茂手木彩, 菅原裕美, 石崎有希, 山本欣司, 田中留伊, 医療観察法における治療プログラム「被害者について考える時間」プログラムの試み,第65回国立病院総合医学会,2010年10月8日,岡山.

7) 菊池汐里, 板山稔, 田中留伊, 統合保育における看護職の働き方の現状と自閉症児に関わる上での役割, 第70回日本公衆衛生学会総会,2011年10月20日,秋田.

8) 長瀬さゆり, 山田哲, 三浦翔, 乗田朋英, 清水清子, 田中留伊, LOCUS トレーニングによる看護師の心理的变化の検証,第65回国立病院総合医学会,2011年10月8日,岡山.

9) 高橋万紀子, 天谷真奈美, 板山稔, 田中留伊, 初回退院した統合失調者と暮らす親の在宅移行期の体験,第70回日本公衆衛生学会総会,2011年10月20日,秋田.

10) 田中留伊, 板山稔, 河井明美, 細谷和夫, 久保田圭子, 菅原裕美, 伊佐猛, 生井淳子, 蕪木雅士, 森千鶴, 医療観察法における物質使用障害に関する看護,第10回日本アディクション看護学会学術集会,2011年10月1日,筑波.

11) 久富暢子, 伊藤桂子, 未成年者飲酒防止活動報告:若者の飲酒を考えるフォーラム,第10回日本アディクション看護学会学術集会,2011年10月1日,筑波.

12) 戸澤順子, 中村裕美, 「虐待」について考える ~虐待される子どもに焦点を当てて~, 第10回日本アディクション看護学会学術集会,2011年10月2日,筑波.

#### 4. その他

1) 田中留伊, 第10回学術集会を終えて,日本アディクション看護学会ニューズレター18号

#### 5. 社会貢献(学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師)

田中留伊

- 1) 第10回日本アディクション看護学会学術集会 実行委員長
- 2) 第42回日本看護協会論文集看護教育 査読委員
- 3) 日本アディクション看護学会 査読委員
- 4) 国立病院機構下総精神医療センター 看護研究指導
- 5) 小澤高等看護学院 非常勤講師

伊藤桂子

- 1) 第10回日本アディクション看護学会学術集会 実行委員
- 2) 第18回若者の飲酒を考えるフォーラム 実行委員
- 3) 第4回日本「性とこころ」関連問題学会 実行委員
- 4) 日本サイコセラピー学会 査読委員

5) 茨城キリスト教大学看護学部紀要 査読委員

中村裕美

1) 第10回日本アクション看護学会学術集会 実行委員

【地域看護学領域】

1. 著書

1) 清水洋子(共著)(2011). 新しい健康教育 理論と事例から学ぶ健康増進への道. 保健同人社,東京.

2) 清水洋子(共著)(2010). 保健師国家試験問題解説 (MEDIC MEDIA)クエッション・バンク 2012. メデックメディア, 東京.

2. 学会における発表

1) 清水洋子, 松沼瑠美子, 牧栄理, 佐藤潤. 地域のこころの健康づくり推進プログラムの実施と効果, 第20回日本健康教育学会, 2011年6月25日, 福岡.

2) 北野淑江, 清水洋子. 子ども虐待予防を目指したグループ・ミーティング支援事業の効果と課題(第1報), 第70回日本公衆衛生学会, 2011年10月19日, 秋田.

3) 清水洋子, 北野淑江, 牧栄理, 佐藤潤. 子ども虐待予防のグループ・ミーティング支援者に関する研究-保健師への実態調査から-, 第70回日本公衆衛生学会, 2011年10月19日, 秋田.

4) 大北啓子, 清水洋子, 古野陽一. 6か月未満児と母へのグループ支援のプログラム効果-参加者アンケート調査より-, 第17回子ども虐待防止学会, 2011年12月2日, 茨城.

5) 清水洋子, 牧栄理, 佐藤潤, 門倉佳子, 前田渚, 和田洋子. 訪問看護ステーションの質改善を目指したアクションリサーチ-記録様式改定版導入初期の職員の主観的効果-, 第16回日本在宅ケア学会学術集会, 2012年3月17日, 東京.

6) 門倉佳子, 前田渚, 和田洋子, 清水洋子, 牧栄理. 訪問看護記録様式の開発(第2報)-サービスの質の向上、記録の効率化について-, 第16回日本在宅ケア学会学術集会, 2012年3月17日, 東京.

7) 佐藤潤, 牧栄理, 加藤理恵子, 清水洋子. コンジョイント分析を用いた就労者における特定保健指導の選好調査, 第84回日本産業衛生学会, 2011年5月18日, 東京.

8) 佐藤潤, 大塚敏子, 加藤憲司, 牧栄理, 山本由加里, 清水洋子. ポピュレーションアプローチに関する実態調査 - 行動変容段階との関連の検討 -, 第70回日本公衆衛生学会, 2011年10月20日, 秋田.

3. 研究助成および研究成果報告書

1) 清水洋子. 子ども虐待予防の評価に基づくグループ・ミーティング支援の効果的展開と

支援能力に関する研究（研究代表者）. 文部科学省科学研究費補助金基盤(C). 2009 年度～2012 年度.

2) 佐藤潤, 大塚敏子, 加藤憲司. 職域における生活習慣病予防のためのハイリスク・ポピュレーションアプローチの連動に関する研究（研究代表者）. 厚生労働省科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（H22-循環器等(生習)-若手-021）. 2010 年度～2011 年度.

#### 4. 社会貢献（学会以外の講演等、学会や行政関連の役員、地域貢献、非常勤講師）

清水洋子

- 1) NPO 日本健康教育士養成機構 理事
- 2) 日本健康教育学会 評議委員
- 3) 日本地域看護学会 学会誌査読委員
- 4) 日本ケアマネジメント学会 評議委員および編集委員
- 5) 日本在宅ケア学会 学会誌査読委員
- 6) 日本健康教育士養成研修会 講師
- 7) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン推進委員会委員
- 8) 三喜会鶴巻訪問看護ステーショングループ 記録改善委員会顧問
- 9) 愛知県一宮市「子ども虐待予防支援のための子育て支援事例検討会」講師
- 10) 新潟県湯沢町認知症施策総合推進事業 高齢者虐待防止ネットワーク会議スーパーバイザー
- 11) 新潟県湯沢町認知症施策総合推進事業 認知症支援・啓発・研修の効果を評価する事業 評価会議 助言者
- 12) 愛知県一宮市 子育て支援グループ検討会助言者,保健師現任教育研修会講師
- 13) 衣浦東部保健所児童虐待ハイリスク者支援技術強化事業（事例検討会）アドバイザー
- 14) 衣浦東部保健所児童虐待ハイリスク者支援技術強化事業（医療連携会議）助言者
- 15) 現代けんこう出版研究会 講師

松沼瑠美子

- 1) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン「平成 23 年度第 3 回こころが元気になる講座」講師
- 2) 新潟県湯沢町ファミリー健康プラン推進委員会 助言者
- 3) 新潟県湯沢町認知症施策総合推進事業 認知症支援・啓発・研修の効果を評価する事業 評価会議 助言者
- 4) 埼玉県看護協会 一般教育・専門教育講師
- 5) 福島県看護協会 ジェネラリスト教育研修講師

- 6) イーマインターネット教育、看護スキルアップ講座/看護ケア講座講師
- 7) 2011 年度パルシステム東京・神奈川ゆめコープ福祉事業部合同研修会講師

## 5、 教職員名簿

専任教員	担当領域	氏名	職名	採用等年次
専任教員	看護基盤学領域	日比野 守男	教授	23. 4.1 採用
		今井 秀樹	教授	22. 4.1 採用
		伴 信彦	教授	23. 4.1 採用
		金子 あけみ	准教授	22. 4.1 採用
		小宇田 智子	講師	22. 4.1 採用
	基礎看護学領域	栗屋 典子	教授	22. 4.1 採用
		松山 友子	教授	22. 4.1 採用
		穴沢 小百合	准教授	22. 4.1 採用
		吉満 祥子	講師	22.10.1 採用
		土田 由美	助手	23. 4.1 採用
		高野 律子	助手	22. 4.1 採用
		竹前 良美	助手	22. 4.1 採用
		成人・老年看護学領域	浅野 妙子	教授
	古都 昌子		准教授	22. 4.1 採用
	石川 倫子		准教授	22. 4.1 採用
	坂本 祐子		講師	22. 4.1 採用
	雛田 雅代		助手	22. 4.1 採用
	今井 真喜		助手	22. 4.1 採用
	小児看護学領域		小村 三千代	教授
村川 陽子		講師	22. 4.1 採用	
鶴巻 香奈子		助手	23. 4.1 採用	
母性看護学領域	宮崎 文子	教授	22. 4.1 採用	
	渡邊 淳子	講師	22. 4.1 採用	
	小嶋 奈都子	助教	22. 4.1 採用	
	早坂 奈美	助手	22. 4.1 採用	
精神看護学領域	田中 留伊	准教授	22. 4.1 採用	
	伊藤 桂子	講師	22. 4.1 採用	
	中村 裕美	助教	22. 4.1 採用	
地域看護学領域	清水 洋子	教授	22. 4.1 採用	
	松沼 瑠美子	講師	22. 4.1 採用	
	佐藤 潤	講師	22. 4.1 採用	
	加藤 理枝子	助手	22. 4.1 採用	
	牧 栄理	助手	22. 4.1 採用	
	見藤 隆子	教授	22. 4.1 採用	
	看護学研究科			

## 事務職員

役職	氏名
部長	木原 英三
係長	上原 朝美
職員	早坂 晴美
職員	鎌田 りみ
職員	下田 織恵
職員	齋藤 容子
職員	山藤 晃司
図書館司書	飯嶋 正敏
図書館司書	官澤 公美子
保健師・相談室担当	原田 直美